
過去が未来を超える今

神道龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去が未来を超える今

【Nコード】

N3268U

【作者名】

神道龍

【あらすじ】

未来では、国による人民管理制度が行われていた。その制度は、極度の電子、機械化により、国の命に逆らう者から最低限度の生活すら奪うというものだった。人々が国の言うことを聞くだけの、死んでしまっている世界を変えようと、一人の男が過去を目指した。21世紀にたどり着いた男は、一人の少年と出会う。とあるきっかけで予期せぬ時間旅行が行われた。その結果、たどり着いた先は、21世紀からは遥かに未来の世界だった。そこで新たに一人の少年と出会う。

過去を生きている。そのことを武器に戦う少年

未来を変えるために自分を犠牲にする青年

偽りの安心にすがりながらも少しずつ変わっていく少年

生きている時代の違う三人で織り成すアンチ？フューチャー？ストーリー、開幕。

交わる

機械音と、呼吸の音だけが静かに響く薄暗い部屋。

目の前にある液晶と睨め合いをしながら手に握っている時計のようなもの——自分の持てる全てを費やして作り上げた最高傑作に最後の調整を加える。

「始めるか。俺の全てをかけた一世一代の賭けを……」

眼を閉じる。

体が軋むのを感じる。

頭が割れるように痛くなる。

「時を越えている」実感が湧いてくる。

手にした時計から体に時間が流れ込んでくる感覚。

今までに味わったことのない不快感。

不思議と、失敗への不安はなくなっていた。

今を変える。

今の自分に未来はあるようでない。

ただ同じ、制御された無機質な時を過ごすだけ。

価値のない未来を過ごすよりなら自分を犠牲にすべてを変える。

すべてが管理されている今。

人間ではなくなった今。

人間になるために。

人間を永遠の牢獄から解放放つために。

そんなことを考えていた。

考えていると、なにかもつと大きな力に圧迫されていく。

そして何も感じなくなった。

「やばい。遅刻しちゃうよ」

自転車をこぐ足に力を込める。

今日は、クラスのみんなとの集まりがあり、遅刻すると申し訳ない背負ったリュックの重さが肩に負担をかけるが、そんな事もいつていられない時間帯にさしかかっていた。

準備に手間がかかったことで、こんなに急ぐ羽目になっている。

高校での球技大会に向けての練習に向かうリュックの中にはグローブとボール。そして脇にはバットのケースもかかえている。荷物は多いが、野球を続けてきたことで、体力には自信があった。

「頑張れ僕の足っ!!」

自信のある足を鼓舞し、風を切りながら、腕につけた時計を見て時間を確認した。

間に合うためには、少しこぐスピードをはやめなければいけない。距離を稼ぐにはうつつけの長い直線道路に差し掛かったところでペダルの上で立ち上がる。

人も車もあまり通らず、絶好のサイクリングロードであるこの道で、スピードを上げた。

「……人？え、え？」

確認して、誰もいなかった少年の視界に突如黒い髪の男が現れる。瞬きをするも、見間違いではない。

「うわああああ、どいて、どいてください!」

大声で叫んだ。

この勢いでぶつかったら野球どころの騒ぎではなく、事件になってしまう。

「終わったか……」

まだ少し痛む頭を抑えながら、当たりを見回す。

辺りには、木が何本か植えてあり、背の高い建物はなにもない。

照りつける日差しの眩しさに目が眩まされると、真つ暗な研究室にいた元の世界との違いに踊る心を抑えることはできなかった。

感慨深く、成功に胸を撫でていると、何かを訴えている不快な叫び声が聞こえてくる。

「なんだあれば。ちょっと待て、なんで向かってくる。おい」

高速で向かってくる得体の知れない物体を知覚した時には、すでに対応する距離も時間もなかったはずなのに、何もない道でほんの一瞬间の時間が無限に引き伸ばされた。

お互いの接近につれて調和する二人の叫び声が、交差する瞬間まで、長く、長く、長く。

そして……落ちた時計と共に、止まった時間が動き始めた。

困惑

「だ、大丈夫ですか？」

直前で身を投げ出したことで、自転車での正面衝突を避けることができた。

その代わりに男同士で抱き合うという、誰も得をしない状況に陥っていたのだが。

背負っていたリュックがうまい具合にクツションの役割を果たしたのか、幸い二人とも大きな怪我はしていなかった。

「な、
なんとかな」

男は、立ち上がり、腰をさすりながら辺りを見回した。

自分は年齢の平均身長に満たないくらいだというのに、彼は頭二つは大きかった。

周りを見ているその表情に影がさし、沈黙が二人を包み込む
周りを見渡すことで、沈黙の理由を察した。

さつきまであつたはずの木などは一本もない。

高層ビルが立ち並び、空に陸に、得体の知れない乗り物が激しく行き来している。

すりむいた右腕に残る鋭い痛みが、夢だと逃避する脳の働きを阻害する。

「あの、ここは一体どこなんでしょうか」

声をかける以外の選択肢など存在しなかった。

無精ひげや血色の悪い顔。きつと見た目は実年齢より老けているだろつ。

ばさばさの黒い髪に真っ黒なスーツに身を包み、某然と佇んでいる。突如現れたこの世界と僕を繋ぐ唯一の手がかりである男は、消えそうなのさ。小さい声を出した。

「ここは、いつだ。いつたい何故動いてしまったのか」

男はうつむき、顔をあげることをせず、消えそうな声で話しはじめ

た。

「……。君は、俺が今から言うことがどんなにばかげた話でも信じられるか。いや、信じてもらわなければ困るが」

男は、僕の反応を待つことをせず、続けた。

「俺は君の住んでいる世紀から何世紀も未来の人間だ。今いるここも、君から見れば相当な未来だろう。はつきりした年がわからないが、ここは俺の世界よりは昔だ。外を人が動いている。今の、いや未来では人々は必要以上の動作をしなくなっているんだ。街には車も人もこれ程はいない。……未来ではたった一人の男がすべての権利を握っていてな。まあ、その話はいい。つまり、この世界は君の世界より未来で俺の世界より過去だ。恐らく君との衝突で俺の時空転送機が誤作動を起こしたせいでこの世界に来てしまったんだ。しかも、時空転送機が見当たらず」

「ちよ、ちよつと待ってください。未来とか過去とか今とか……：そもそも時空転送機つて。もっとわかりやすく説明してもらえませんか。わからないことだらけで全然状況が見えてこないです」

文句を言うと、男は咳払いをひとつしてスーツを整える。

ゆつくりと息を吐き出し、話を続けた

「簡単に説明し直そう。ぶつかったことで、俺達がこの世界に来た。この世界は真ん中だ。俺の世界はここより先の、君の世界はここより前の。ぶつかったことで、帰る手段はなくなってしまっただろうだ、わかりやすいか」

男は笑っていたが、その表情の奥からは、自分の言った言葉を噛みしめて、改めて状況が思わしくないらしいということを読み取れるような。そんな笑顔だった。

「わかったことはわかりました。わかりましたけど、帰る手段がないって……」

苦笑するしかない僕と彼。

互いに気持ち悪い笑みを浮かべているその様子は、周りの人から見れば滑稽極まりなかっただろう。

「君、名前は。俺はシュウヤだ。呼び捨てで構わない。その……巻き込んでしまったことは本当にすまないと思っている。なんとしてでも元の時代に帰してやるから安心してくれ」

「僕は、浦野駆です。よろしくお願いします」
とりあえず頭を下げておく。

置かれている状況が状況だけに流れに逆らうことは許されないことはわかってしまったからだ。

「そこにいと通行の邪魔だけど。なんか鉄の塊も落ちてますし。片付けてくれると助かるんですけど」

やり取りを中断させたのは、僕より少し背の高い少年だった。

「あ、ごめんなさい。ここ通路ですよ。すぐにどけます」

駆は、倒れている自転車を起こし、荷物を整理した。

シュウヤに今後の事を聞こう、そう思っただけで振り返ると彼の顔はさっきよりも引きつっていた。

「なあ、それ何？その鉄の塊。何に使うの？」

話しかけてきた少年が、興味深そうに自転車に触りはじめた。

自転車のことを「鉄の塊」と言いながら。

初めて見たものを知りたがる。当然の行動であつたが、時代の隔たりを感じさせるのには十分すぎる一言だった。

「これは、自転車っていう乗り物ですよ」

それ以上の説明を思いつかず、乗り物であること以外の情報を伝える事ができなかった。

自転車の本質を説明しろ、と言われても誰ができるだろうか。

「へえ、これが乗り物。でもずいぶん細いな。動力はどこについているんだらう。この二つの丸いものはどんな役割をしているのかな」
そんなことを考えている間にも、少年はとても楽しそうな様子で、自転車を触りながら思った事を一言一言口に出していた。

改めて周りを見渡してみると、街を走る自転車など一台もなく、地面を走る車のような乗り物には丸いものータイヤはついていなかった。

「シュウヤ、この世界は…あれ」

さっきまでそこにいたシュウヤの姿が自転車を見ているうちに消えていた。

「どうして俺の名前を？前に会ったことあるか？」

代わりに帰ってきた返事は少年からだった。

つまり、この少年も名前がシュウヤ。そんな偶然はあるのだろうか。一つの仮説が立った。それなら、どこかへ消えたことにも説明がつく。

僕が見てきたいわゆるSFでは、過去の自分や未来の自分に会うことは危険だ、ということになっている。

ここはごまかしておくに越したことはないだろう。

「いや、ないけど。なんか、君はシュウヤって感じの顔だからさ」
言ってすぐに後悔した。

こんなバカがいるわけがない。確実に変人認定をされてしまった。嘘をつくにしてももう少しまともな嘘があった。

「お、そうなのか。名前が顔にあってるってのはなんだか照れ臭いな」

心配が取り越し苦労だということがわかった瞬間、思考は本題へ向いた。

（名前が同じ……そして逃げた。そしてタイムマシン。）

仮説の真偽を確かめる手段はなかった。しかしその予想が正しければ彼なら生活できないなんて事態には陥らないだろう。この世界を基準にすれば、彼は未来の人間だ。過去である自分よりは勝手がきく。問題は、次に彼と会うまでに自分が生きていられるかどうか。自転車に夢中になっていたシュウヤに目がいった。

「ねえ、シュウヤ君」

「ん？何？」

「僕、この辺り来るの初めてなんだ。街を案内して欲しいんだけど……ダメかな？」

シュウヤは、眉をしかめて、一言ため息をついた。

「なんで嘘つくんだよ。IDの更新の時に必ずこの街にくるだろ」

お泊り交渉の掴みに、大失敗。

IDの更新という謎の単語も出て来たせいで、どう取り繕っているのか全くわからなかった。

「正直に言えよ」

シュウヤは、黙っている僕を問い詰めるかのように、顔を近づけてくる。

過去。未来。大人のシュウヤ。いろんな事を抱えているせいで、冷や汗が止まらない。

だが、その心配をよそに彼はふつと笑顔になった。

「迷ったんだろ。恥ずかしがらないでそう言えっの」

歯を見せて笑った顔に、苦笑いで応じた。

もしかしたら、天然なのかもしれない。

必ず来る町だといったのに、迷うってことはないんじゃないかと思ってしまう。

とにもかくにもこの世界について把握しなければ何も始まらなく、野垂れ死んで終わってしまう。

「ば、ばれた？シュウヤは鋭いな。是非、案内よろしく願いします」

「おう、今からちょうど昼ご飯なんだ。一緒に食べに行こうぜ」

未来色

「そついや、案内する前にその重そうな荷物と、えっと……」

「自転車？」

「そう、それ。うちにおいていこう。近くだからついて来て」

シュウヤは地面を軽く踏みならした。

体をすこし傾げるだけで真っ直ぐに進んでいる姿を目の当たりにして、思わず硬直してしまう。

「どうしたんだよ、早く来いって」

回転までスムーズで、科学技術は普通の靴でどこでもスケートを可能にしまったのか。そんなことを考えながら自転車にまたがり、シュウヤの元へと漕ぎ出した。

「なにそれ、カッコいいな。それ、そうやって乗る乗り物なのか。後で乗せてくれよ」

「僕はその靴に驚いてるんだけど。じゃあ、僕にもそれ使わせてね」
シュウヤは妙にはしゃいでいる。

こっちは未来の技術に唖然としているのに、あっちは過去の遺産に感嘆している。

シュウヤと並んで走行しているのだが、自転車と同じスピードが出ていることに、少し腹が立った。恐らく、自転車の方が10倍くらいの労力を使っているだろう。

そしてなによりも、周りにいる全員が好奇の目で見てくるので恥ずかしかった。

幸いなことにすぐに着いたので、心へのダメージは最低限で済んだ。

「ほら、貸してやるよ」

荷物を整理していたところで、シュウヤが靴を差し出してきた。

「え、いいの？シュウヤは？」

「これは前履いてたのだからな。使い方教えるから置き終わったら外出てな」

そう言い残すとシュウヤは部屋から出ていった。
どうやら、この靴を持っていないことは珍しいことでは無い様子だった。

ポケットに財布と携帯電話だけを入れ、部屋から出た。
外に出ると、腕組みをして得意そうに立っているシュウヤがいた。

「よし、じゃあ使い方伝授してやろうじゃないか。よく聞けよ。まず、この靴で地面を一度踏むんだ。それがスイッチとなって、靴の周りに磁場が発生する。この道路には電気が通っているから強力な磁場が出ていてな、その反発を使って浮いているわけだ。後は手に持っているリモコンで、操作する。はい、リモコンだ」

大事な操作の部分をリモコンの一言で片付けられてしまったが、手渡されたリモコンは、真ん中にレバーがあるだけの簡単なものだった。

そして練習すること10分、シュウヤから公道で走れるレベルだな、と合格をもらったので、二人で街へ繰り出したのだった。

街についてからも驚くことばかりであった。人間が店番をしている店はほとんどない。

「ねえ、誰もいないけど盗まれたりしないの？」

「は？盗むわけないだろ。んなことしてばれたらIDを剥奪されて一生を棒に振るっての」

IDという単語が再び登場した。話の流れから買い物に使われるものだということは分かった。ポイントカードみたいなものなのだろうか。

考えていると、果物を置いている店が視界に入った。見慣れないものばかりで疲れていたところに、自分のいた時代で見慣れた柑橘類が目に入り、迷わず財布を取り出した。「みかん」と平仮名でかか

れたその看板にはこの進んだ未来の中で愛着がもてる数少ないものだろう。所持金は2187円。200と書いてあったので、仕方なく1000円札を取り出した。

商品棚を見て、困惑する。お金を入れるところがないのだった。

「これ、どう買えばいいの？ お金入れるところがないんだけど」

「いや、お前、そんな紙切れで何するつもりだよ」

またしても非常識な人に思われてしまった。まさか通貨が円から変わってしまったのか。

これも、ジェネレーションギャップなんだ、と大人たちの気持ちが少しわかった気がした。

「こうやんだよ」

シュウヤがポケットから一枚のカードを取り出し、「みかん」と書いた札に当てた。

カードが一瞬光り、爽やかな音がした。そしてシュウヤはオレンジを一個とって背負っていたカバンにしまった。

「僕、それもってないんだけど。」

これはどのくらい非常識なんだろう、何を言われるんだろう、そう思い、恐る恐る切り出してみた。

「……。」

沈黙。

言葉を失うほど恐ろしいレベルの非常識らしい。

もう慣れてきている自分は適応能力が高いんだならと前向きに捉えてみた。

「シュ、シュウヤ？」

「あ、ああ。それがないと、この街では何も買えないぞ」

一瞬の間の後、答えてくれた。余りの衝撃がシュウヤの時間を止めてしまったらしい。

「な、何も？ ってことはこのお金は全く使えないの？」

そういつて千円札を見せた。

「この紙切れ、お金なのか？ なんか人の顔が書いてあるけど。いつ

の時代のだよ。ん、そういや、俺は行ったことないけど、もう少し行ったところにアンティークショップってのがあある。あそこは古いものなら何でも買い取ってポイントにしてくれたはずだ。行ってみるか？」

IDに続くこの世界の通貨に関する単語が出現する。

「ポイント？」

「IDをもっていないやつが買い物するためのまあ疑似通貨ってことだな」

（つまりこっちのプリペイドカードってことか。）

IDとポイント、二つの経済システムがあるらしい。IDについてはまだよく分からないが、とりあえず勧められるままに店に向かうことにした。

「ねえ、IDってどういうシステムなの？」

もう顔を見ないで聞くことにした。一回一回珍しいものを見る目で見られたら心が持たないからだ。

「IDってのは、国から言われた仕事をちゃんとこなしたやつが生活するためにもらうカードのことだ。それぞれランクがあつてな、Aが一番上でDまである。Aは役人だけが持っているカードで、無制限に物を買える。Bより下は、それぞれ決められた上限があつて誰でも同じだけ与えられる。上限以内なら自由に使うことができるんだ。更新は二週間ごとで、残しても繰越しはできないし、どんなに足りなくても前借りはできない。」

国から命じられた仕事をこなせば必ず一定額の給料がもらえるシステムのようだ。国の偉い人大量のお金を使えるっていうのはどの時代も変わらないようだが。

「国から言われた仕事をしなかったらどうなるの？」

「IDをうばわれてそいつの人生はおじゃんだな」

返ってきた予想外の答えに思わず驚いてしまった。

IDを奪われるということは人生が終わるということにつながる。

つまり、今の僕は終わっているということだった。

さっきの「人生を棒に振る」というのは逮捕されて社会的に傷が付くという比喩的な意味ではなく、本当に人生を終わらせることになるという意味だったらしい。

理想の未来

そして、着いた店では本当にこの時代にそぐわないものがたくさん売っていた。自分の時代のものを探してみたが、あまり多くの物を見つけることはできなかった。シュウヤは何かを見つけたらしく、恥ずかしいほどの大声で呼んでくる。行ってみると、壁には買取価格表が貼ってあった。損傷具合や時代について、事細やかに記載されてあった。

そして…… たかだか2000円だった所持金は、この時代では半年は暮らせる金額になったらしい。
その後も街ではたくさん初めてを見つけることになった。

つい最近、学校で書かされた「理想の未来」というタイトルの作文コンクールの原稿を思い出す。

理想の未来は、機械が発達し、どんな人も平等に生活に困らない世界。

そんな内容で書き進めた作文だった。

この風景を見た後ならもっと上手い文が書けたのに、とってしまった。

シュウヤの住むこの場所は、自分の理想の世界に限りなく近い、平和な世界だった。

「さ、買って来たもの食べようぜ」

シュウヤの家に帰ってきた二人は買って来た食べ物を広げていた。

「そつえば、シュウヤはIDってので買物できるんだよね？ 少しでも奢ってくれても良かったのにな」

そんな冗談を言ってみた。

「奢る？買ってやるって意味か。できないからわざわざポイントを作りに行ったんだろ。それができたらID剥奪の意味ないし」

「でも、ちよつとくらいならいいんじゃないの？」

「10歳以上になると、ばれたら一発で関係者全員のIDが紙切れになるんだよ」

言っていることは理解できたが、友達との奢りあいが出来ないなんて変な話だ。

理想の世界にこのシステムはいらないな、なんてことを思いながらこの世界で初めて買ったみかんに手を伸ばし、無造作に皮を剥き始めた。

「お、おい！何してるんだよ！」

突然隣で大きな声上がる。

このパターンはいいかげんに慣れてきた。きっとこのみかんはシュウヤが目をつけた特別おいしいものなのだろう。もしかしたら一つだけ高かったりするはずだ。

「なんでみかんを手で破ってんだよ！」

予想とは違ったが、確かを手で破るなんてのは非常識だ。

(……これも違うの？)

もうなにが正しいことか、という感覚がマヒしつくして、もう痺れも感じなくなってきたているのだろう。一瞬本当に間違っているかも知れないと思ってしまった。

僕の知る限り、みかんは冬のこたつでむいて食べるものだ。

「じゃ、じゃあどうやって食べるの？」

「んなもん、あいつに預けて食べれるようにしてもらうに決まっているだろ」

そういつてシュウヤは部屋の奥に立っている一台のロボットに指を指した。

どうするんだろう。僕やシュウヤより大きいこのロボットがみかんに何をするのか。

全く予想がつかなかったから、何が起こるのかを見届けることにした。

「ほら、頼んだぞ」

シュウヤがロボットにみかんを手渡した。等身大のロボットは左手でみかんを受け取り、みかんを見る動作をする。右手を前に伸ばし、変形が始まる。その親指が引っ込んだかと思うと、その場所から親指と同じ大きさの刃物が出てくる。この時点で何をするのか予想はついてしまっていた。だが、まさか発展した科学技術がそんなことをするはずがない。きっとこの先には想像もつかないような作業があつて、美しく、手とは比べ物にならない方法でみかんを向くのだろう。ロボットはおもむろに右手をみかんに当てがった。

そして……皮を剥き始めた。

「むいたあああ！予想はしてたけど本当にむいた……」

「いきなり大声だすなよ、びっくりするだろ」

あまりに予想外で、予想通りすぎる結果に思わず上げてしまった大声に、シュウヤは迷惑そうだった。

こんなことをして、科学は迷走しているんじゃないかと心配になる。

「いや、だってわざわざロボットにやらせる必要性がないと思うんだけど」

「じゃあどうやって食べるんだよ」

「みかんってのは、こうやって手でむいて食べるものなんだよ」

先ほど中断された続きをして見せる。

その様子をまじまじと眺めながら、真似をしようときこちない手つきでみかんと睨め合いをしているシュウヤはとても子供っぽく見えた。

「うわっ」

シュウヤが突然声をあげる

「どうした？」

「実を潰した。これ難しいぞ」

指をなめながら、続きにとりかかる。

未来の人っていうのはみな、こんな風に不器用になるのだろうか。

僕たちにとってはこんなに簡単な、当たり前のこと。

未来では、それがすべて機械の当たり前になり。

未来では、それをさせることが当たり前になり。

未来では、それをするのはとても難しくなり。

少し切ない気持ちになった。

「おい、なんか指が黄色くなるんだけどどうにかなんないのか、これ」

シュウヤはみかかんを口に運びながら爪についた色を落とそうとしていた。

「それが幸せなんだよ、きつと」

シュウヤに向けてではなく、この世界の全ての人へ。

きつと、こういうことが幸せなんですよ。

そんな思いを込めて一言つぶやいた。

ルームシェア

しばらく話し込んでみると、先ほどの口ボが料理を運んできた。

二人でお金を出しあつて買った食材だったから、二人で食べても問題はないらしい。もしお金を出していなかったら、こんな風に料理を出してあげることダメなのだろうか。それはどこか間違っている気もする。

でもそれは僕が過去の常識で考えているからであつて、彼らには普通なのだろう。

「これ、おいしいね」

「だろ？うちのこいつは万能なんだよ」

運ばれてきた料理は、どれも美味しかった。食材や料理の献立自体にはあまり変化がない。定番はどれだけ時間がたつても定番なようだ。見慣れた野菜や肉を使った料理。違いは作るのが機械になっただけ。

「シュウヤ、今度料理作つてあげる」

自分の感じた寂しさから出た言葉は、シュウヤにはまたしても頓狂に聞こえてしまったらしい。人が料理をするなんて、という顔をされる。

でも僕は決めた。僕の、過去を生きている僕なりの、人の作る料理の暖かさを教えてあげようと。

もしかしたら変わらないのかもしれない。自己満足かもしれない。でも、無性に作つてあげたくなった。母親から教えてもらつて、美味しいといつてもらえたオムライスを。

「そつえば、帰りはどうすんだ？家、どこの地区にある？」

「い、家は……」

うまい言い訳が思いつかず、目を泳がせてしまう。

家はきつと五百年ほど前の日本にあるんだよ、なんて言つても仕方

がない。

「俺に今日手に入れたポイントを半分くらい払ってくれないか？」
シュウヤからの突然の提案だった。

何故かは分からなかったけど、指示通り、僕の時代で言う貯金箱のようなものにポイントの溜まっているカードを当て、残り金額のちょうど半分を支払った。

「これで、家賃支払い完了だ。こんだけ払ったらしばらくは住んでも問題ないはずだ。この家にしばらくいろよ」

シュウヤは、本当に楽しそうな笑顔で言っていた。

「ちなみに、ここに住んでる間はこのポイントは自由に使っていいからな。家賃は形式的にやっとかないと……な」

つまり、ここに住んでいいよ、ということらしい。

住むところなんてない僕には、願ってもいない提案だった。

「うん、ありがとう。でも……シュウヤはさ、ID持っていない理由とか、家がない理由とか聞かないの？ 今日初めてあった僕にこころでしてくれて」

墓穴を掘ったと思った。理由を聞かれたらなんて答えよう。

過去から来たから。そんな冗談みたいな理由が信じられるわけがない。物的証拠はいくらでもあるから説得はできるのかもしれない。でも、洗いざらい話すことには抱えている事情が事情だけに抵抗があった。下手すれば二度と帰れなくなることになる可能性もあり、帰るまでは秘密でいたかった。

だからこそ、優しくされる理由が欲しかった。

異性ならまだしも、会ったばかりの同姓にただ同然で住ませてやるなんて、僕にはできない。

僕がすべてのものを盗んで朝にはいなくなっている可能性だってある。

何も持っていない僕ならなおさら。

どうしてお金を自由に使っていいなんて言えるんだろう。

僕は考えれば考えるほど自分の卑しさにあきれてしまう。

でもこれは僕の、僕たちの常識だった。

彼らに通用しないのはわかってても僕の目には常識のフィルターがかかる。

考えたくなくても、僕たちの思考には必ず常識がつきまとう。

その常識の中にいれば、意識しなかったことで。

こうして違う環境に放り込まれると嫌でも意識させられること。

考えても答えが出ないことはわかっていたけど、いやでも常識に考えさせられる。

「お前といると楽しいからな。なんかお前、他のやつとは違うんだ。物知りで、俺……いや、俺だけじゃなく誰よりも一歩先を行ってる気がするんだ。なんていうか、お前は知らないこと多すぎるけど、俺の知らないことをたくさん知ってる。それは絶対楽しいことばっかだと思う。みかんだってこれからはきつと毎回手で食べるんだ。IDがないってのは大抵は辛い理由とか、役人に口答えした、とかそんなことばっかだ。話してるほうも聞いているほうもいい思いをしない。そんな理由より、もっといろんなことを知りたい、教えてほしいんだ」

笑顔のシュウヤの言葉は、重かった僕の胸に沁み渡った。

こんな言葉を聞いてしまったら、なにもあてがない以上頼らずにはられない。

その変わり、彼にはいろんなことを教えよう。

まだ常識を捨てられそうもない、僕なりの利害一致。まず、自転車の乗り方から。一つずつ、一つずつ。

「ありがとう」

僕の心からの声は、自然と口から出てしまっていた。

再会

目を開ける。

いつの間に寝ていたのだろうか。

起き上がると、見慣れない家具が目に入る。

体を起こすと、徐々に脳が働き出し、何が起こってしまったのかを再確認した。

「お、起きたか。朝飯はもうできてるぞ」

できれば女の子に言って欲しいセリフが飛んできた。

立ち上がって伸びを試みる。

「こういう時はたいてい夢なんだけどな」

ボソツとつぶやいた。

一日たった今も未来にいる。

奇妙な同棲生活が始まって、一日目の朝。

「俺、今日学校と仕事行ってこなきゃならないから夜までいないぞ」

「学校だけじゃなくて仕事？バイトかなんか？」

「バイトってなんだよ。時々良くわかんない単語使うよな、お前。国から言われた仕事をするすることでIDが使えるんだから仕事するんだろ」

バイトという制度はこの時代には無いらしい。

一回、この時代の国語辞典に目をとおしてみたほうがいいかもしれない。考えてはみたが、国語辞典があるかどうか微妙な気がしたのでやめておいた。

外国人はきつとこういう状況の中文化になれていくんだなあ、なんて感心したりもした。

それよりも、同じ歳くらいのシュウヤが、学校だけじゃなく仕事もしているなんて、少し負けた気がして悔しかった。

「僕はどうすればいいかな？」

「自由にしてていよ。家にいてもいいし、街の探検に行ってもいいと思うぞ。迷ったらいけないからこれ持っていくといいよ」

そういつて、整頓された机の引き出しから取り出した一枚のカードを手渡してきた。

「これもお金？」

カードを見たが、用途が全く思いつかず、お手上げ状態だった。

「電話だよ、電話。画面をこすると電源が入るから、あとは画面に書いてあるボタンを押せばいい。俺の番号はいれといたから」

どうやらスーパースマートフォンだったらしい。僕の世界にあるものは、進化を続けるとカードになる物が多い。中身はどうなってるのかは想像もつかなかったが、言われた通りに操作してみると、表面に電話やメール等の項目が出る。

「うん、なんとかかなりそうだよ。ありがとう」

「んじゃまた後でな」

そういつて、シュウヤは出て行った。

今は一つでも多くの情報がほしい僕は、街にでることにした。
もしかしたらポイントで過去に行ける、なんて店もあるかもしれない。

いや、ないか。

残りの半分のお金と、シュウヤに渡された電話だけを持って、オートロックの扉を閉めた。

「よ、駆」

そこには、見たことのある顔があった。

「なんですか、シュウヤさん」

「シュウヤでいいって言ったのにな」

黒いスーツに身を包み、恥ずかしそうに頭を掻いているのは、僕をここに連れてきた張本人だった

「どうしてここにいますか？」

わざと不機嫌そうな顔と声を作り、問い詰める。

「俺んちだからに決まってるだろ。きつと住むことになるんじゃないかと思つて来てみたら案の定だ。ほれ、これ持ってきてやったぞ」

そういつて手渡されたのは、僕の名前が入ったIDだった。

「どうしてこんなものを持っているんですか？」

「ちょっとしたコネだ、褒めたたえろよ。あと敬語やめてくれ、なんかバカにされている様に聞こえてつらい。さんづけもできればやめてくれないか」

「……この時代にコネなんてあるわけないでしょ、そっちもこの時代の人間じゃないんだから。あと、なんて呼べばいいのさ」

「く、鋭いところを突くな。まあ説明すると長くなるから割愛だ。必ず元の時代に帰す。だから、今は普通に過ごしてくれ。準備ができたらまた呼びに来る。そして俺のことは……確かにややこしいな。シュウとでも呼んでくれ。」

「どのくらいかかるの？」

「……すまん。見当もつかない」

核心にせまる質問で、はじめてシュウヤの表情が曇った。

あの時に見せた顔と同じ。

責めても問い詰めても意味がないことをわからされてしまった。

「わかった。待ってるよ。僕にはどうしようもないことだしね」

「すまない。ではまた来る」

そういつて、シュウヤは止めてあった車のようなものに取り込み、

去って行く。

こっちは彼に任せてるしかないのです、この世界に温度を合わせるための探索に向かった。

香り

しばらく歩いていると、この辺りで一番大きな商店街だ、と教えてもらった場所に着いた。

少し歩くと、中央の広場には、綺麗なガラス張りのドームがあり、中は人で賑わっている様子である。

近くの店で、ポイントを使いたくさんの食べ物を買った。

懐かしい物を見るとつい買ってしまう、懐古主義というのはこのことなんだろう。

たった一日でもものすごく歳をとった気がした。

上着のポケットにポイントカードを戻して、また歩き出した。

ポイントを使ったのは、自分のお金があるうちはIDに頼らずに過ごしたかったから。

その方が、元の時代との繋がりを保てる気がした。

「あ、危ないですっ！」

周りを見ながら歩いていると、突然声が聞こえる。

その声の方を向いた瞬間、目の前には女の子がいた。

気づいた時には避けられない災厄が訪れていた。

「だ、大丈夫ですか？ごめんなさい！」

彼女が、覆いかぶさる形で倒れこむ。

その衝撃はとても大きく、痛みに襲われる。

ドラマなんかでよくこんなシーンがあるのを見るが、実際に起こるとそれなりに痛かった。

「あ、あの、大丈夫ですか？すぐにどけます！」

そういつて、僕の上から立ち上がった女の子は、しゃがみこんで右手を延ばして来た。

綺麗な目で見つめられている。

伸ばされた白く細い腕がとても綺麗だった。

長く真っ直ぐな黒い髪を左手で抑えているその少女の優しく緩んだ口元と少しだけ赤い頬が僕の心拍数を上昇させる。

手をとって起き上がると、僕より頭一つ小さいくらいの少女は、微笑んだ。ショートパンツから伸びる脚は、モデルを思わせる。どことなく大人の表情は、心を掴んで話さなかった。

「怪我とか、してませんか？」

「う、うん、大丈夫」

少し低めのかすれた声。

耳に響く優しい声が、更に鼓動を速めさせる。

「私、ちょっと急いでたんです。ついぶつかっちゃって……本当にごめんなさい」

そういつて物凄く深々と頭を下げた。

なびいた黒髪から、ふわつとしたいい香りが鼻をかすめる。

視覚、聴覚、嗅覚が変な感覚に支配される。

「いいよ、そ、そんなに気にしなくて。そっちも怪我はない？」

「はい！私は全然大丈夫です。あ、すいません。急いでのので、また会うことがあったらしっかりとお詫びしますね！」

少女は慌ただしく、優しい香りを残して走り去っていった。

ぶつかった時に過去に帰れたりしないかな、なんて思ったりもしたが、そううまくできてないのがこの世界。

頭の中は、どことなく大人で、潤んだ瞳をもった少女のことではなかった。

せめて名前だけでも聞いておけばよかったな、と少し後悔しながら、見物を続ける。

この街で興味があるものと言えば、電子機器。

この薄型の電話といい、IDにしたって技術が進みすぎている。つまりは、想像もつかないような便利グッズが売っているはずで。

いろんな店を見ていると、時計が目に入った。

過去に来てからも、僕の左腕についている時計は時間を刻んでいる。しかし、時間は変えなくなかったから、もう一つ、この世界の時間を刻む時計が欲しかった。

商品棚を見ていると、ほとんどの時計が時計以外の機能付きだった。もはや時計と言えないような多機能すぎるものもあり、見ていて全く飽きない。

その中で、限りなく僕の時代に近い物を選んだ。

同じデザインなのに、ついている機能はライト、音楽プレイヤー、IDを登録して買い物……その他多くの機能があり、全く使いこなせる気がしなかった。

帰ったら説明書を熟読しよう、そう決心して上着のポケットに手を入れ、カードを探す。

その手はポケットの中で空を切るだけだった。

「お、おとした？」

さっきぶつかったところに落としたんだ、と思い、時計をおいて行ってみるも、誰かに拾われたのかどこにもなかった。

探す気は全く起きなかった。

あれだけの金が入っているものを親切に届けてくれる人が、この世界にいたのだろうか。

「帰ったらシュウヤに謝って家賃使わせてもらうしかないのか……」

気が重くなって、足が自然と帰路にむいた。

IDを使ってまで買い物をする気にもなれなかったからだ。

情報収集のための探索一日目は、なんとも悲しく幕を閉じるのであった。

疑心

帰り道、いろんな思いが浮かんでは消える。

親はきつと心配しているだろう。

もともと持っていた時計を見ると、夜中だった。

今頃顔色を変えて警察に届けを出しにいたりしているかもしれない。

今日野球の約束をしたみんなはなんて言ってるんだろうか。

明日からの学校は？。

僕は今、どんな存在なんだろう。

普通じゃないことは確かで、とても不安定なんだろうな。

時間を超えることで、もともといた場所で何か変化があるのだろうか。

それに、過去を変えると未来が変わってしまうと言われるけど実際のところはどうか。過去に戻れたとして、僕がこのことを周りに話したりしたら、この時代は来ないのかもしれない。今、僕を住ませてくれているシュウヤを変えてしまったら僕をここに連れてきた大人のシュウヤは？大人のシュウヤがいなくなったとしたら、僕はここにいないわけで……

「はあ……」

解決しそうもない悩みが、自然と空気の流れを作り出してしまふ。

「よ、駆。ため息なんかついてどうしたんだよ」

「はいね、もう仕事は終わったの？」

この時代ではまだ夕暮れ時で、仕事があるというから夜遅くなると思っていた僕にとってはとても早い時間帯。

「ああ、俺の今週期の仕事は蓄電所の雑用なんだけどさ、なんか今日は作業があるから早く帰っていいよっていわれてな」

「蓄電所？」

「作った電気を一回全部溜めておくところだ。そっから街中に分配

されるんだ。まあ、街の心臓って感じだな」

僕が物を知らないことにいちいち驚かず、素早く解説してくれるようになったシユウヤに感謝。

「今日は風呂入るか？」

どんなハイテクなお風呂が飛び出してくるのか、魅力的なお誘いを断る理由はなかった。

「ありがとう、入らせてほしいな」

「えっと、それじゃあタオルは……あれ」

そこで、家中の電気が消えた。

「て、停電？」

「んなばかな……何のための蓄電所だと思ってんだよ。作業でミスでもしたのか？」

「ねえ、なんか声がするんだけど」

そういつて、壁に近づくと、微かだが音声を聞き取ることができた。

【——います。繰り返します。私達は、蓄電所及びその他の施設を制圧させて頂きました。電気が欲しいという方は、ポイントと交換して差し上げます。できればの話ではありますが、武力行使でもかまいません。警備用のロボット達で丁重におもてなしさせていただきます。ご希望の方は中心街センターホールまでどうぞ。私達は富豪と、無謀な人間をいつまでもお待ちしております。繰り返します——】

聞こえてきた音声はやたらと不快な内容で、挑発している様にしか聞こえない。

「シュウヤ、これは？　いつたいなんなの？」

「確か、前にもこんな奴らがいた。その時は一つの施設を乗っ取っただけですぐ捕まったはずだ。だいたい、普段から蓄電所の警備は万全……　なはずで」

「整備、だね？」

シュウヤは首を縦に振ると、話を続けた。

「おかしいとは思った。普段は警備にあたる人とロボットが必ずついていることになっている。でも今日だけは、それも含めて全員が帰された。今まででこんなことは初めてだったけど、まさかこんなことに……」

「それって国の命令なんだよね？」

「そうだけど……　きつとこの情報を事前に手に入れた奴らがこんなことをしたんだ」

「警備ロボってどんなもののなの？」

「うちにいるのとはほとんど同じだ。スペックは限りなく人間と同じように作られている。脳にあたるプログラムを書き換えると今みたいに自由に動かすことはできるから、全部あいつらの思い通りだろうな」

「このままだとどうなるの？　警察は？　国は？」

「多分何もできないと思う。ロボットは、街に流れている電場から得る磁気を活用して動いている。停電したら、道路に流れてる電気がなくなるからあの靴も、車も全く使えなくなつて誰もまともに動けない。国だって多分金で電気を買うしかないはずだ。でも、まともな値段で取引が行われるかどうか……」

「とりあえず出てみない？　ここにいたつてしょうがないし。あのガ

ラスの綺麗なところだよな？様子見に行こうよ」

玄関に向かつて歩き出した僕の腕をシュウヤが掴む。

「無理だ。電気が通っていないからドアは開かない。それに何で行くんだよ。歩いて行ったら20分以上かかるぞ」

「それが？」

「それがって……」

「電気、戻らなかったらどうするの？」

「それは……どうもできないけど……」

「どうもできないって、死ぬってこと？」

「いや、えっと……」

「どうもできなければ、黙ってここにいろの？ねえシュウヤ」

「んなこといったって無理なもんは無理だろ！じゃあどうすればいいんだよ」

シュウヤは大きな声を上げる。

僕は気付き始めていた。この時代の「型」に。

これは仕掛けがある。

きっとこれは……お遊びだ。

人々を躍らせて、楽しむための。

未来からきたシュウヤの言葉を思い出す

…… 未来ではたった一人の男がすべての権利を握っていてな。

きつとこれはパフォーマンスだ。

おそらく警備は甘いはず。

この国の人間は、「電気がないと何もできない」「生きていけない」「どうしようもない」と思う。

だけと思うだけだ。誰も何もできない。しない。

でも、僕は違う。

僕は、僕だけはこの時代の「型」にはまっていない。きっと何かできる、そんな気がしていた。

ロボットはあくまで人間レベルの動きをするだけで、生きていないだけ戦いやすそうだ。

「行こうよ、取り返しに。黙ってるよりよっぽど生きてること、実感できるよ」

右手に、共に時を超えた少ない仲間であるバットケースを携えた。

誤算の塊がこの時代にいるってことを、示さなければいけない。

そして、シュウヤの言っていた死んだ未来。

僕の手で少しでもましになるのなら。

……ここで死んだら僕は帰れない。

まずは、目の前でおどおどしている男を、無理やりにも連れ出すことから始めなければならぬようだった。

このままでは、きっとシュウヤが言っていた、一人の世界になってしまう。

一人ではできなくても、あるいは二人なら。

この男なら、僕と触れたことで「型」を壊すことができる気がした。

変化

「シュウヤ、あのね、僕はやっぱり……」

「行ったらなんかいいことあるのか？」

「え？」

「行っても、結局なんもできなくて、それで終わりだろ。そんな意味ないことしたって、辛いだけじゃないか」

「今いかなきゃ未来で後悔するよ。きつと」

「行ったら後悔するよ。だったらおとなしくしてたほうが安全だろ」

「なんでわかってくれないのさ！」

「そっちこそなんでそんなに連れて行きたがるんだよ！」

お互いに感情的になり、子供の喧嘩のようになってしまっでも、これでいいはずだ。

この時代にはきつと外に出ようなんて思う人間は一人もいないはずだ。

「はあ……はあ……シュウヤは本当に強情だな……」

「駆だつて……しつこいんだよ……」

「一個……聞いていいかな？」

「んだよ……言ってみろよ……」

「富豪の人に電気買いに来いって言ってたけどさ……、誰も家のドア開かないから来れないんじゃないのかな……」

「……ふ。確かにそうだな。何考えてんだ、あいつらは。はは、はははは」

「だよね、あははは。」

何分経っただろうか。

お互いに、息が上がるほど叫んで、意見を交えた。そして、笑った。

あまりに大きすぎる意味をもった笑い。

「っていうより、俺らもドアが開かないから出れないんだって」

「ごめん、図々しいんだけど、許可取って窓壊す気でいたけど」

「本気で言ってるのか、お前……」

「僕の住んでいるところでは、子供は窓を割って育つものなんだよ」

そういつて、バットのケースを掲げて見せた。

壊すのは、バットを使ってではないが。

それに、居させてもらってるのに窓を壊すなどという失礼極まりない発言は、考えてみると物凄くばかっている。

でもきつと、ここで黙ってたらシュウヤの言う支配された世界になってしまう気がして。

うぬぼれかもしれないけど、この世界に来たのは偶然じゃないような気がして。

普通の僕でも何かできるような。

僕にしかできないことをやらなければいけないような、そんな衝動が体中から湧き上がるようだった。

「割れよ」

それは、この時代に光が差し込んだ瞬間だったのかもしれない。

「いいの？」

「生意気でずうずうしい居候がうるさくてかなわないからな。見に行くだけだ。それに……冷静に考えてみると、電気が通っていない街を見れるのは今回だけかもしれない。電気がなくなったらこの街

がどうなるのか、見てみたい気もしてきた」

神妙な面持ちのシュウヤだった。きっと怖さもあるに違いない。

「よし、いくよ?」

「お、おう」

バットをケースから取り出して構えをとると、突然電気が復旧した。
「電気がついた。どうなってんだ」

暗闇に目が慣れて来たところで、いきなりついた電気に目が眩む。
シュウヤが驚いていることから、単なる偶然なのかなんのかはよくわからなかったが、僥倖だった。

「とりあえず外に出よう」

ドアから外に出ると、辺りで電気がついてるのはこの家だけ。

改めてみると、光が一切無い街は全てをのみ込みそうなほど恐ろしいものだった。

きっとこの闇はこの世界の未来まで奪うんだ。

だから……僕は。僕たちは。

自転車に近づくと、カゴの中に入っていた袋に目がいった。

中を見ると、携帯電話のようなものが一組と、ライト、そして一枚の液晶のようなものが入っていた。

街を包む闇の中光るその画面には、「南口が薄い」というメッセージと、内部の地図が表示されていた。

ここだけが復旧した理由は容易によさうできた。

「電気、シュウヤのおかげだったんだ」

「なんかいったか?」

「なんでもない。ほら、早く乗って」

自転車の荷台を指差すと、シュウヤは怪訝そうな顔をした。

「こ、これにか?」

「当たり前でしょ。足挟まないように気をつけて」

少し重くなったペダルを漕ぎ始める。

「ちょ、待って、待って。これ怖すぎるから！スピードあんま出さな！」

「頼むから揺れないで！危ないから」

「なんでエンジンついてないんだよ！」

「自転車にそんなものついてるわけないでしょ！」

前途多難だった。

自転車が安定するにつれて、街の暗さの助けもあつてか不思議な空気に包まれている気がした。

機能を失った未来の街の中で、あまりに不格好な人力で動く一台の自転車。

回るタイヤが暗闇を照らす光を作り出す。

「なあ」

「ん、なに？」

「お前、すげえよな。強い。今こうして考えるとさ、やっぱりあそこにいちゃだめだと思った。ありがとな」

突然の言葉。

どんな表情で言っているかは読み取れないが、穏やかな声が静かな夜に融け込んでいく。

「いきなりどうしたのさ」

「こんな街、初めて見るってさっき言っただろ？想像以上なんだ、こんなのは。こうして真っ暗になるなんて今まで考えたことが無い。怖いんだ、今。こんな、暗くて何も見えなくて、誰も頼れる人もいなくて」

「僕がいるよ」

「……はは。きつとさ、あのままじつとしてたら電気はいずれ直つて、また普通の暮らしに戻つてた気がする。でも、こんなことは考えなかったはずでさ」

シュウヤは自分を嘲るように少し笑つて続けた。

「バカみたいな話だけどさ、お前、もしかして未来から来てたりするのか？未来がダメになつたから、過去を変えに来たりしたのか？」

停電している街の中、全身に電撃が走つたような気がした。

準備万端

「な、なんでそんなこと……？」

正確に言えば当たってはいないが未来を多少は知ってしまった以上、完全に外れてもいない状況だった。

「いや、大分強情に俺のこと説得しただろ？普通会ったばかりのやつとあんなに大声で喧嘩っついかな、意見ぶつけ合うことできるかなって思ったりしてさ。まっ、そんなわけないか、ははは」

不意を突かれて速くなった鼓動は冷や汗へと変わり、流れ落ちる。なんとなくだがこういうことは知られない方が良い気がしていた。詳しく知ってるわけでも体験したわけでもないが、時間矛盾が起これるかもしれないことというのは漫画やゲームでよくみられる描写で、できるだけ隠し通せることに越したことは無いはずだ。

「見えてきたね」

視界に入ってきた、夜の闇を照らす大きな光が、皮肉にも話題を反らす最高の材料だった。

近づくと、その光にたくさんの人が群がっていた。きつとこの人たちは電気が消えたときには自宅にいなかった人達なのだろう。

そして、そこにあるものは憎しみと罵声だった。

俺が先だ。

私の方が金を持っている。

お前に電気を使う価値は無い。だけ。

邪魔だ。

俺が。

私が。

お前じゃない。

消え失せる。

帰れ。

シュウヤは言葉を失って、ただただその様子を眺めていた。実際に目撃すると、本当に目を背けたくなる、人間の現実。生きるために他人を蹴落とし上位にたたなければならぬ獣の姿。それを脇目に、少し遠目の位置に自転車をとめて、シュウヤの顔を見る。

「僕たちで取り返そうよ」

立ち尽くすシュウヤの肩を少し強めに叩き、喝を入れる。

そのことで、僕も気持を保っていられる気がした。

正直取り返すといっても、本当にそんなことができる自信はない。でも、僕は少なくとも目の前の男を変えることができた。

「ここって南口？」

「いや、北だ」

シュウヤは、僕の出した液晶を覗きこみながら答えた。

「南口が甘いと思う。裏から回って中に入ろう」

「……ああ。なんか俺うまく乗せられてしまった気が……」

光に群がる獣達を刺激しない様に、暗い闇の中に融け込みながら建物の脇を通る。

「これ、持ってた」

袋に入っていたもう一つのもの。カード型の電話だった。

「これ、電話だろ？電気が通ってないと使えないよ」

「特別仕様だから大丈夫」

「どうやってこんなの手に入れたんだよ」

「ちよっとしたコネだよ」

「お前、この町に来たばかりでコネなんてないだろ！」

「ははは。ばれた？今日見つけたんだよ！（カゴの中で）」

「それは掘り出しものだったな、こんな時には役に立つ」

以前に同じ光景を見たことがあるような気がしたが、そのやり取りが二人の緊張を解きほぐしていった。

「1、2、3。ロボットは三体だな」

南口を守っている警備ロボットは三体だった。

「ねえ、あいつらは本当に人間と同じって考えてもいいんだよね？」

「ああ。ほぼ変わりないはずだ」

所持品を確認する。ボール、グローブ、携帯電話、財布、バット、カード電話、ライト。

こっちの世界に飛んだそのままの荷物に詰め込んできたから、ボールなんてものも入ってしまった。

「作戦、考えたよ。よく聞いて、これは……二人じゃなきゃできないよ」

「作戦？」

シューyahは首をかしげる。

「まず、僕がああのロボット三体を引きつけるから、シュウヤは南口に行つて、鍵がかかってないかを見て来て欲しい。かかっていたらそのバットでドアか、その辺のガラスを叩き割つて無理矢理開けてくれ。開け終わったら、電話で連絡したあと、バットを構えて待機してて。僕がそつちに行くから、ロボットの背中から一体ずつ全力で殴つて壊すんだ。」

「んな無茶苦茶な。大体こんな棒で壊せるわけないだろ！」

「大丈夫。それ、ロボットを破壊するための兵器だから」

この世界では野球がないのか、金属バットはつかわないのか、バットを知らなかったのをいいことに、渾身の嘘を言い放ってしまったが、あと数分もすれば現実になるから良しとしよう。

「これが？……言われてみればそんな気もしてきた」

ホームランバッターさながらの構えをするシュウヤに心の中で謝りながら、頭の中で段取りを何度も繰り返す。やはり、囷になる時は自転車が必要だろう。

「それじゃあ、自転車とつてくる。作戦決行の合図は電話だよ」

描いた作戦は、まずこの建物についてよく知ってるシュウヤには、侵入形路の確保を担当してもらう。そして、人間と同じレベルなら自転車の速さならギリギリ逃げ続けることができるはずで、ライトの光を使い、誘導する。時間はかかっても、一体ずつなら潰せるはずだ。

自転車に向かう間もずっと考えていた。上手くいかなければ即捕まってしまう。失敗は許されない。だけど、鬼ごっこみたいだ、とわくわくしている自分もいる。

リュックを自転車のカゴに入れ、ライトを取り出す。ペダルに足をかけ、ゆっくりと大きく息を吸う。

「よし、いっつ」

合図の電話をかけてから、南口へ向かって漕ぎ出した。シュウヤとは電話の後、自転車の光が見えたら動き出す約束になっている。

「こつちだよ！」

ライトを片手で振り回しながら、挑発するかのようにロボットの目の前を通過する。

小刻みで、整った機械音で、後ろに着いてきているのはわかる。

足音は、二つ、三つと増えて、予想通り、全員を引き付けることができた。

電話の音量を最大にあげておくと、ちょうど通話ができる程度の大さの音は出るので、お互いにどんな状況かを把握することができた。

「鍵がかかっている。えっと……壊すんだよね？でもこういう建物壊したらいけないだよな……」

「そんなこと言ってる場合か！早くして！」

「悪い。了解だ！」

自転車を漕いでいると一つの誤算が見える。

ロボットは散開し、とりかこむようにしてドームに近づけないように動き始めたこと。

想像してた以上の人間的思考。僕を捕まえるために全員で追ってくると思ったのが甘かった。近づけないことを重視した思考パターンに、頭をフル回転させて対抗しようとする。

ドームへの距離は20

m。しかしその間に二体のロボットが、僕の移動に合わせて、僕とドームを結んだ直線状の位置をキープし続ける。全力で漕いだとしても、正面突破は厳しかった。

そして、自転車の後ろからは一台が追ってきている。つまり、止まったらその時点で終わり。

想像以上に分が悪い。

逃げることはできるが、これでは一向に近づけず、下手すればシュウヤが見つかる。

電話から響く、ガラスの割れる音。

「こっちは終わったぞ、いつ来る？」

「ちよつと厳しいかもしれない。こいつら、思ったより頭がよかった。そっちに向かうのが難しく、今精一杯頑張ってるんだけど思いつかないからぐるぐる回ってるところ」

「……駆がこっちに来る方法……。一個だけ思いつく」

「何？どんなことでも言ってみて」

「俺が、駆みたいにならライト振って走りまわったらどうだ」

「そんなことしたらシュウヤが捕まるよ」

「何のための兵器だよ。俺がお前を助ける」

「随分というようになったね。三体だよ？」

「……やってみなきゃわからない、いくぞ」

辺りは街灯がすべて消えていくくらいが、ドームの自体の光にかき消され、シュウヤの姿だけがぼつとりと暗く映る。

ロボットの目線は全て僕に集中しているようで、どれもシュウヤには気付かなかった。

「ドーム……。そうだ」

一人つぶやいて、カゴに入っている電話に向けて声をかけた。

疾走

ここはドーム。つまり、逆側から回り込むことができる。引き連れて回り込めば、ロボットよりも先に入り口にたどり着くことができる。

「僕がドームの逆側から回り込む。そうすれば上手く入ることができるはずだ。そこでじっとしてて」

「わかった」

自転車の向きをもと来た道に向け、聞こえているのか、理解できるのかはわからないが、つい挑発の言葉もかけてしまう。

三体が見事についてきて、作戦は完璧だった。

これなら輪を描いて上手い具合に入れる。

大分速いスピードで走っているの、腿に酸が溜まってきているのがわかる。歩行については、明らかに人間より優れている。疲れを知らないという部分では、むしろ人間以上だ。

さっきの人達が並んでいるあたりまで着いて、後ろを振り返って始めて気づく。

先ほどまでいた三体のうち、一体しか追ってきていない。

「まずい。ちゃんと見てなかった。」

ロボットに、ここでも僕の思考を上回られる。

全員で行くのは得策じゃないと判断するなどという思考をロボットができるなんて思わなかった。

いくらなんでも人間的すぎる。

シユウヤの言う「ほぼ人間と同じ」がここまで再現されたものだとは思わなかった。

プログラムではなく、本当に考えて動いている以上、今まで思っていた作戦ではどれも齒が立たない気がしてくる。

僕の持つ過去の常識でのロボットなら簡単だったはずの攻略が、完全に技術に負けている。

「おい、ロボットが戻って来たけどどうすればいいんだ」

「とりあえずみつからないように隠れてて！今何とかするから、絶対」

絶対、というのはシュウヤ、そして自分を安心させるためだけの根拠のない言葉。

シュウヤからの連絡の後、電気を求めて並ぶ人々の最後尾を通過し、南口へ向かうルートに乗ると、距離が短くなるにつれて考える時間に制限があることが重くのしかかる。

南口が見えてくる。

何の具体案も出ていないのに。

10・9、8……心の中でカウントする。

南口方面に出る道に合流してしまう時間。

ここまで来てしまった以上、気付かれなかったらそれでよし、ロボットたちに気付かれたら……やるしかない。

「3・2、1……行くぞ」

僕は立ち上がり、自転車で全力漕ぎをした。

ロボットは、僕の前面のライトの光を感じ取ったのか、ドームの南口を警備していた残り二体のロボットの視線がこっちを向く。

でも、僕はスピードを緩めない、むしろ上げていく。やることは心に決めていた。

後ろのロボットを引き離し、全力で。

「いっけええええええええええ！！」

僕は体を意図的に投げ出す。自転車のスピードが残る僕の体は一回転し、地面に思いつき叩きつけられる。

地面は堅くはなかった。しかし、勢いが強く強く打ったためか、受け身をとったにもかかわらず、一瞬呼吸が止まる。

金属と金属がぶつかる音が響く。

せきこんで呼吸を取り戻した僕は、音のするほうに視線を送る。

自転車は、一体目のロボットの胴体部分にあたり、その衝撃で破損軌道が変わったロボットは、そのままの勢いで後ろにいたロボットに直撃し、二体目も一部を破壊し、まともに動くことができなくなっていた。

突如思いついた、無茶すぎる作戦は大成功。

全力で自転車をこぎ、その勢いの自転車を相手にあてる自爆戦法。体の痛みを代償に十分すぎるほどの効果を得た。あとは侵入するだけだ。

体をさすりながら起き上がった目の前には、僕を後ろから追いかけていたロボットがいた。

目の前に立つ機械は、ビルの様に大きく立ちはだかった様に見える。機械は、自分の仕事を遂行する為に右腕を伸ばしてくる。

服の襟をつかまれると、恐ろしい力で引き寄せられ、体のバランスを崩す。

抵抗してみるが、力は想像以上に強い。

作戦は失敗、シュウヤも……

そんなことを考えた時、

「ナイス駆！」

近づいてくる声。

刹那、衝撃と共に、体が機械の腕につかれたまま宙に舞う。

倒れこんだ目線の先にあったのは脇腹の辺りの中身が露出し、煙が上がっている僕を追ってきたもののなれの果てだった。

服が上手い具合に手から離れ、体の自由が戻る。

同時に、シューヤが駆け寄って来た。

「大丈夫か？作戦、バッチリだったな！二体に戻って来た時にはどうなるか不安だったけど、あんな大胆な作戦で二体とも倒すなんて驚いたぜ」

その代償に失われた自転車を見に行く。今後と同じやつが何体も出てくるはずだ。構造を知っておいて損はない。

それに、自転車の衝突レベルで二体とも壊せたということにも疑問を持った。二人で近づいてみると、ロボット自体には外傷はあまりなく、機能が停止した要因がよくわからなかった。

「ねえ、どうしてこいつらは動かなくなっただろう。シューヤが壊したのみたいに、部品が破壊された、とかじゃないのに……」

「これじゃないか？」

手招きする方へ行くと、シューヤの指さす先では背中の部分にある四角いパーツが、少しずつ外れていた。

正面からぶつかったことで、ドミノ倒しの様に背後から地面に倒れた際に外れたのだらう。

少しずれているパーツには、よくわからない文字が羅列されている。
「このパーツ、なんだろう？」

「これは動力装置だな。街の物はたいいていこれで動いている。あの靴だって、街中の電気製品は発生する磁場をこの装置で使えるエネルギーに変えて使っているんだ」

「つまり、あんなに派手にやらなくても……」

「これをずらせば止めれるってわけだ！」

「ところで、停電してるなら動かないんじゃないの？」

「いや、この周辺だけが使えるようになってる。この中も電気がついてるから、きっとあの中に電気から作り出した磁場をコントロールしてる装置と、奪った電気を貯めてある装置があるはずだ。」
「つまり、それを壊せば街は元に戻るんだね？」

二人のやることが明確になったところで、南口から中に侵入した。

この作戦には穴がありすぎた。

いまだに埋められない過去と今の常識の差。この先もこの調子でいってしまったら、必ず時代の差に潰される。

僕が過去を生きていたこと。

それは、この時代では大きな武器だ。

しかし、それは大きな弱点にもなってしまう諸刃の剣だった。

この武器だけは、変えることも捨てることもできない。

僕に出来るなら、この世界での未来をどうにかしたい。

こんな思いが生まれ始めていた。

根源

中に入ると、通路に部屋がいくつもある。

もらった地図は、よくみると相当大雑把であり、細かい部屋に関しては全く記載がない。

廊下には明かりがなく、ライトで照らしながら歩く。シュウヤは闇にあまり慣れていないらしく、少し怖がっている様子だった。暗い廊下をライトで照らしながら歩く。そんな状況に襲いかかってくる敵でもいたらもうどこかのゲームのような世界にいるようだ。もっとも、こつちには銃もなければ剣もなく、あるのはバットだけだ。けど。そんなことを思いながら角をまがると、何かにぶつかる。

ライトでそれを照らすと、先程も出くわしてしまった体つきに無表情な顔。

「で、でたあああ！シュウヤ、逃げるよ！」

「え、ちよつと待て」

シュウヤの手をとると、全力で走り出す。なんで男の手を取って走り出してるんだ僕は……

一歩遅れてそれも追いかけてくる。

自転車でもやつとだったのに、

走ること逃げ切れる可能性はほぼ0。そして、狭い通路では背中を狙うこともままならない。せめてどこかの部屋に入って少しでも抑えることができたなら、弱点を突くための余裕ができる。一番近くにあった部屋のドアに手を伸ばす。すると、ドアが勝手に開いて、そのままの勢いで中に入ってしまう。

「じ、自動ドアか」

広い部屋の中でそれと向かい合うが、部屋の中ならまだ勝ち目はある。一人が囷になれば一人が背中に戻り込むことができる。

そう思ったのもつかの間、二体目、三体目の仲間が次々に部屋に入ってくる。どうやら彼らは連絡を取り合っているらしい。

「なあ、これってもしかしてさ……」

「言われなくてもわかってるけど、超まずいんじゃない……」
お互いに顔を見合わせる。

見合わせたところで何かが生まれるわけではなく、彼らは一步步歩み寄ってくる。

「こうなったら、やるしかない！」

シュウヤはそう言い放ち、バットを振りかざしながら向かって行く。一番近くにいたロボットの右肩から叩き込まれたバットはそのフレームを曲げ、ひしゃげてできた空間に飲み込まれた。機能を停止した彼はその勢いのまま左側に倒れこむ。

「ぬ、抜けない」

彼にめり込んだバットは、飲み込まれたまま抜けなくなっていた。僕らの持つ唯一の武器は、一体目で使用できなくなってしまった。

「は、離せ！」

それと同時に、バットを引き抜こうとするシュウヤの両腕を残りの機械が拘束した。

シュウヤは抵抗しようと暴れるが、ポケットに入っていたライトとカード型電話が落ちただけで、抜け出すことは叶わない。

シュウヤは一体のロボットに完全に拘束されてしまう。

もう一体がゆっくりと距離を詰めて来るのに合わせて一步步後ろに下がる。

一対一だが勝ち目はない。

目の前に立ちほだかる絶対的な威圧感への恐怖から手足が震える。後ずさりする足がもつれ、腰を床に打ちつける。

床に這いつくばり、それでも逃げようとうつぶせになって進む。すぐに部屋の隅にたどりついてしまい、逃げ場がなくなった。

壁に背中をつけ、上を見上げるとこちらを見下ろす機械。

冷徹な、感情のこもっていない顔で僕を識別しているのだろうか。機械の右腕が僕の左腕に伸びる。

それを避けようと、手を余裕のない後ろに下げる。

その手は、角ばったものにあたり、鋭い痛みを感じた。シュウヤの落としたライトがちょうど滴る鮮血を照らす。

僕の左手を切り裂いたその物体を見ると、四角い箱に文字が書いてあった。全く解読はできなかったが、書いてある文字の中に機械の背中に書いてあった文字と同じものが見えた。

（これだ！）

力の入らない左手を軸に、体勢を崩しながら右手に持っていたライトの持ち手を思いきり振りかざし、四角い箱の上面に強烈な打撃をたたき込む。

何かが割れる音。

機械の伸ばした腕が、体の上を通過し壁にぶつかった。そして、そのまま倒れ込み、彼の伸ばした腕だけが僕の上に乗った。

脈をうち、生温かい液体が流れている感覚。

その傷と引き換えに、機械の動きを止めた。

今壊したのは恐らく、シュウヤの話したエネルギーの元を小さい範囲内で作り出すためのもので。

「か、駆！」

シュウヤはライトを拾いあげ、そばに駆け寄って来る。

「よかった、シュウヤは無事だったんだ」

「なんか急にあいつが動かなくなっちゃンスだと思って抜けて来た。——っ、お前、その手！こいつにやられたのか！？」

シュウヤは僕の上に手だけを乗せて倒れている動かない機械を一瞥して拳をつくる。

傷は八割型自滅だから何も言えないし、シュウヤの握った拳に申し訳ない。

「こんなの平気だよ。それより、その装置をみて。無我夢中でこれを壊したら機械がとまったんだ」

シュウヤは、上部が破損し、中の回路が割れたそれを照らす。

「これはもしかすると小型の磁場発生装置。だとすると、この辺り一体のロボットは全く動かなくなってるはずだ」

「え、バッテリーとかないの？」

「電気がなくなるとかはありえないはずだったからな。そのおかげで助かった」

僕の上に乗っている動かない機械をどかして、僕の右手を引つ張る。立ち上がった僕は、地図を取り出して現在位置の把握に努める。

「というか、これは動くの？」

「そういえばそうだな。どんな仕組みで動いてるんだろうな」

ここでは全てのものには、電池切れはない。その代わりに磁場がなくなったら終わらしい。

そうするとこれは、過去の遺産なのか、それとも未来での原点回帰なのかはわからないがこの時代では十二分に役に立つ。

血の滴る左手の傷の上の部分を、ポケットに入れていた袋で縛ってから、印の部屋を目指す。

その間に、シュウヤは機械に埋まったバットを引き抜こうと格闘していたらしく、手にはしっかり握っていた。

途中で倒れている機械をよそに、最短距離を進む。

そして、その部屋の目の前で、一呼吸おいた。

部屋には明かりが灯っていて、そこだけ別電源であることを意味していた。

つまり、ロボットがいてもおかしくはなく、むしろいると考えて進んだほうがいい。

タイミングをはかり、突入する前に一度中を見れやしないか。

部屋を覗き込もうとすると、

「そこにいる二人、早く部屋にはいつてくれないか。退屈しているんだ」

今回こそ、用意に用意を重ね、事を少しでも優位に進めようと画策していた僕らに声がかかる。

その声は、放送で聞いた声と同じものだった。

完全にばれているのに捕まえに来ないのは何故か。

この状況では嫌でも口車に乗るしかなかった。

相変わらず思惑と大きく外れた道に進んでしまうこの状況にため息をひとつさげ、ドアに手をかけた。

静かに開いたドアの奥にいたのは、二人の男。

二人とも若かった。おそらく僕らより少しばかり年上である。

唯一明るいこの部屋では、二人がはっきりと見える。

一人は頭に手をのせ、長い銀色の髪をかきわけ、動作を繰り返している。

もう一人は、短い銀髪で、笑っていた。

二人は並んだ椅子に座り、こちらをじっと見ている。

「ねえ、君たちは何をしに来たんだい？」

短い髪の男は、指を僕に向けて、答えの分かり切った質問を投げかける。

瓦解

「何をしにきたって、電気を取り戻しに来たに決まってる！」

隣でシュウヤも頷いていて、まさに臨戦体制だ。

次にどんな言葉がくるのか、どんな仕掛けがあるのか。

頭をフル回転させて、想像しうる可能性に一つ一つ対策を練る。男の僕に向いた指先が別な方向を指差す。少し前方。彼らの座っているのと同じ椅子だった。

「そう熱くならないで、まあかけなよ」

少し笑った中世的な美しい顔立ちは、倒すべき犯罪者の予想図とははるかにかけ離れていた。

「なんのつもりだ！ふざけるな」

「大丈夫だよ。座った瞬間電気が流れたり、拘束されたり、なんて仕組みはないから。せつかくここまで来てくれた大事なお客様なんだしね。少しお話しようよ」

「お前らの言うことなんか誰が聞くか！」

シュウヤが声を荒げるのに対し、相手は至極落ち着いた様子で、挑発しているようにさえ見える。

そして、そのやり取りを聞きながら一度冷静に、考える。

罠だとして、どうして今更そんな回りくどいことをするのか。

ここには電気が通っている。やる気になればいくらでもロボットを動かして今すぐ捕まえることはできたはずで。

それに、最初から感じていた違和感の正体を確かめたかった。

これは本当にこの二人が起こしたもののなのか。

裏に絡んでいる大きなものがあるのではないのか。

「……わかった」

僕が椅子に向かい歩いて行くと、シュウヤがうるたえる。

「ちよつと待てよ！言うこと聞く必要なんてないだろ！絶対騙そうとしてるって！」

足を止めることなく椅子に腰を下ろす。

座っても何があるわけでもなく、緊迫した空気が流れる。

「コーヒーでも？」

おどけて聞いてくる男の様子は本当に癪に障った。まるで僕が座ることを最初からわかっていたみたいで、思い通りに動かされているようだった。

「信じきったわけじゃないから遠慮しておくよ」

「くくく、そうか。せっかく眠らせておこうと思ったのに、残念だ」
バットを持ったシュウヤが、僕らの間に立つ。

「ほらみる。こいつらは犯罪者なんだぞ。何してくるかわかんないんだ。話なんか聞いたって仕方ないだろ！」

「シュウヤ、それは人に使う物じゃないよ。それに、ここでは圧倒的に僕たちに不利だ。従うしかない。逆らったらきつとロボットの大群に捕まるさ」

「彼は良く自分の状況を理解しているようで助かるよ」

短い髪の男は、顎で合図すると、もう一人はのそつと立ち上がり、何かの装置をいじりだした。

壁の扉が開き、中には大きな箱のような物体が一つあり、その中で時折稲妻が走っていた。

「これは、奪った電気を貯めている機械さ。もし君たちが力で解決しようとしたならこの電気をすべてIDの管理センターに送るよ。

そうすると電気は戻るがIDだけは誰も使えない。すなわち経済が崩壊するってことだね。もっとも、僕たちはそんなことを望んではないんだけど、君たちはどうなのかな？」

「シュウヤ、やっぱ」

「わかったよ。座ればいんだろ、座れば」

シュウヤは僕の言葉をさえぎって隣にある椅子に腰を落とす。

あきらかに不機嫌そうな様子だったが、それを気にしている暇はなかった。

この状況はあまりに滑稽だ。

敵の本拠地で親玉二人と向かい合って着席、談話なんてそんな構図があるはずがない。

何から切り出そうか迷っていると、相手が先に口を開いた。

「僕はケイ。こっちはカイ。こいつは無口だが余り気にしないでくれ。君たちの名前も教えてくれないか？」

「駆です」

「……シュウヤ」

「ありがとう、カケル君、シュウヤ君。さて、お話といつても何を話せば楽しいのかな、最近の若者はどんな話が好きなんだろう。カイ、わかる？」

カイと呼ばれた長髪の男はその髪を揺らしながら首を横に振る。

「あんたは何が目的なんだよ！まさか本当に俺たちと話をするのが目的なわけないよな。とつととホントのこと言いやがれよ！」

イライラに耐えきれなくなったのか、シュウヤが立ち上がり大声を出す。

ケイは、全く気にしない様子で、最初の笑顔のまま少し考えている様な素振りを見せる。

「だめかな？若者と話すことは脳の活性化にいいって誰かが言っていたような気がするんだけど」

「シュウヤ、怒ったらだめだよ。相手の思うつぼだ」

完全に怒り切っているシュウヤをなだめるために声をかけておく。

「ケイさん。あなた、なんでこんなことしたんですか？」

その言葉を聞いた瞬間、彼から笑顔が消えた。

笑顔の消えたその顔は整いすぎていて、まるで人形。女の子に使う褒める比喻ではない。本当に人形のような、見ているとすいこれそうな恐ろしさだった。

「それを聞いてどうするんだい？ただの愉快犯だよ」

その言葉を言い終わったときには、元の笑顔になっていた。

「嘘ですね。それなら今頃僕たちは捕まっていますよ。あれだけの戦力を持っているのに」

「まさかあの小型の発生装置を壊されるなんて予想外だったけど、捕まえてほしいのかな。最近の若者はそういう思考が強まっているのか。そうか……盛んなんだな」

「そうやってくだらないごまかしで本題からそらすのをやめてください、彼が怒ってしまうので」

大人しく椅子に座り、足や手を動かしているシュウヤのほうを見て、視線をケイに戻す。

「では、こんな質問をしようかな。犯罪をしたらどうなると思う？ シュウヤ君」

わざわざシュウヤに名指しで当てることに悪意を感じるが、おとなしく話を進めるにこしたことはない。

「捕まるに決まってるだろ」

ぶっきらぼうに答える様子を見て、何だかんだいいつつ大人しくしていることに感謝する。

ここで暴れられたりしたら大事なものをつかみ損ねる気がした。

さっきの質問。物凄く当たり前のことを質問する時は大抵裏には大事なことが隠れている。これは一種の決まりごとで、それを読み解くのがこの探りあい、ゲームのプレイヤーの仕事だ。

「ではもう一つ、シュウヤ君。捕まったらどうなるのか知っているかい？」

「罪を償うに決まってるだろ」

「どうやって？」

そこでシュウヤの言葉が途切れる。

どうやって、か。どうやらこの時代でのそれは懲役ではなく、その内容を民間人は知らない。情報を整理すると、見通しが良くなる。

「知らないんだ。君たちの生活の根幹なのにね。教えてあげるよ、平和ボケした君たちに。捕まったらね、少ないご飯で一日中、命をかけて働かされるんだよ。IDなんて制度を支えるためにね。そこで命令を聞かなかったら最後さ。食べ物も飲み物もまるで手に入らなくなる。直接殺さないんだ。酷い話だよ本当に。純粋な犯罪者だ

けじゃない。何らかの理由で国の命令を達成できなかっただけの善人も、犯罪者と同じく扱われて有無を言わず働かされるんだよ」

ケイの話は衝撃の内容だった。確かにIDという制度は明らかに国に負担が大きすぎるとは思っていた。その強制されてつじつまを合わせている人たちがいる。簡単に言えば国の奴隷だった。

「どうしたんだい？言葉でもないのかな。無理もないよね、君たちのこのぬるい生活は、自分がちゃんとしてることで成り立っているって思ってるんだもんね。でも実際は違うんだよ。簡単な話でね、君たちは所詮人の生き血をすってるだけの悪人なんだよ。まあ犯罪者である僕たちが言っても説得力なんてないんだけどね。ちなみに僕らはあと80年その生活を続けなといけならしいよ。80年だってさ、笑うしかないと思わない？人生の半分なんてもんじやないよ、死んだほうがましなんだよ。でもね、死ぬのは怖いんだよ。どうなるんだろうって思ってしまったてね。まあそんなはなしはどうでもよくて……」

ケイの顔に笑顔が戻る。その笑顔は心からのものではないのは分かり切っていて、心が急に締めつけられた。

あの落ち着きと笑顔——あの目は、未来が失われた、光の消えた世界を見据える目。

「今度はカケル君に質問です。なぜ僕はここにいるのでしょうか」

取引

僕に向けられた質問。自分で八十年と言った男が目の前でその理由を聞いてくる。

早く出てくる方法。それは、

「脱獄か」

「いやいやまさか。僕はそういう荒っぽいことが苦手でね、なんてカイ、あのデータを出して来て」

冗談を交えながら楽しそうに語るケイに踊らされないように感情をコントロールすることに全力を注ぐ。

少しでも気を抜けば怒りで冷静な判断ができなくなる。

「しかし、あれは機密事項だと……」

「僕がいつていったらいいの。僕やカイがどれだけ最低な人間かを教えてあげるんだから」

そこまでいうと、カイは頷いて立ち上がり、同じ装置を操作する。程なくして僕とシウウヤの目の前にスクリーンが一枚現れる。

「蓄電所、及びその他周辺施設を二日間制圧。その後、迅速な復旧作業をせよ。作業の内容次第で刑期を免除し、IDの再発行もする。私の計画に協力してくれ。断れば、それなりの扱いをさせてもらう。よく考えておいてくれ。くれぐれも機密にしておいてくれ。あんなテロ未遂をした君たちの力を借りたいんだ。いい返事を期待している。」

カイは目を通し終わった頃合いを見計らって、血色の悪い顔を近づけてくる。

「……くれぐれも他言無用ですよ。さもないと……わかってますね」

すぐに自分の席に戻っていく。

その様子は、ケイとはまた違ったベクトルの気持ち悪さだった。この二人はなにか気持ち悪い。一人はこの世のすべてが見えているかのように、この世界を嘲笑っている。もう一人は、生きていないかのような不気味な動きをする。歩くとき、しゃべる時、全てが普通の人よりもゆらりとしたもので、話すときもいちいち怖い。

「さて、ではここで昔話と行こうか。僕らがどうしてこんなことになったのか。僕ら二人はね、普通の学生だったんだよ。電気系統を学んでいてね、将来を有望視されていたんだよ。でもね、ある日僕らはある研究に没頭していたんだ。それが君が壊した小型の磁場を作り出す装置でね。この小型装置があれば、空中や海底のような磁場の弱いところでも、恩恵を受けることができるはずだ、と思ってるね。そして、それが完成したときに事件がおこった。他のやつに僕たち二人の手柄を全部横取りされたんだ。僕達は精一抗議した。そうすると、そいつの親は役人だったんだ。そのせいで僕たち二人のIDはなくなった。IDがなくなったら犯罪者になるか死ぬかの二択しか道はない。だが、僕たちには他人より優れた点——電気知識があつてね。世間を見返してやる、そう思った時、思いついたのがこの計画だ。街中の電気をなくせば大混乱を招き、上手くいけば国を乗っ取ることさえできるかもしれないってね。でも、なぜだか知らないがその計画は実行前にばれていて一か所を制圧しただけで拘束されてしまった。僕らはほんの少しの傷跡をつけただけで終わってしまったんだ。そして……僕らには強制労働の日々が待っていた。おそらく君たちが想像している以上のね。そこには老若男女問わずいろんな人がちまちまと内職をしているんだ。機械が作った人形たちのパーツの組立なんかは全部人間の仕事だ。それだけじゃなくて、僻地での生産活動なんかも含まれる。そしてここに大きな罠があつてね。IDがなくなったら犯罪をする。犯罪をしたら捕まって労働をさせられる。刑期が終わったら解放される。ただし、ID

は再発行されないんだ。つまりこの輪廻の中から出ることは到底無理、ということになる。あのメモに書いてあった再発行とはそういう意味だ。だから君たちには邪魔をされたくないんだ。あとたった一日と半分くらいの間、おとなしくしてほしいんだ。もちろんそうしてくれたら君に危害は加えないつもりだ」

シュウヤは何も言わない。

僕も何も言わない。

二人とも何も言えなかった。

見たくなかった現実を、知らなければ幸せに過ごせた世界の裏を知った。

「……つまりはそういうことです。シュウヤさん、カケルさん。もともと来た道を御帰り願えますか？大丈夫です、安心してください、ロボットが追ってきたりなんてしませんから。それとも、今すぐ拘束されたいですか」

カイは、いつの間に移動したのか、僕らの椅子の後ろから声をかけてくる。

「他の人たちが困っててもいいっていうのかよ」

「もちろんだよ。僕たちの働きが支えてあげているんだ。たまには苦しい思いをするのもいい機会なんじゃないかな。それに、他人の心配ができるなんてシュウヤ君はまだまだ子供だ。生き残るための戦いに身を投じたことがない意見だね」

シュウヤがその声に応えるやいなや、二倍も三倍もある言葉を返してくるケイ。

この世界は管理されている。

誰かの誰かによる誰かのための制度。

……未来ではたった一人の男が全ての権利を握っていてな。

もう一度あの言葉を思い出す。そして、カギがそろっ気がした。

「ケイさん。その通達は誰から来たんですか？私の計画とは、誰の計画なんですか？それを教えてくれませんか？ちなみに、もし教えないというのなら……こんなのはどうでしょうか。」

僕は手に持っていた過去の携帯電話を見せる。録画停止のボタンを押し、撮ったばかりの動画を再生して見せた。

一言一句残されているその動画は、媒体ともども予想外だったらしく、ケイの表情を変化させた。

「珍しいものを持っているんだね、君は。そんなもので動画がとれるなんて意外だ。そして君は交渉事が上手い。よく嫌われるタイプの人間だね」

「あなたほどじゃないですよ。あなたも嫌われてそうです」

そのやり取りの間にケイの表情は元に戻っていた。

「ははは、君は本当に面白い人間だ。交換条件をのもうじゃないか」

逆転勝ち

「物分りのいい人で助かります。ちなみに、今すぐ拘束しようなんて野暮なことは無しですよ。ボタン一つで全世界に発信できますから。捕まえたところで作戦は失敗ですからね、それさあなたの望みではない。ですよね？」

わざと丁寧な言葉を使う。嘘がばれない様に極力平静に、落ち着いて。

この時代に来てから電波は一度も入っていない。つまりこの携帯は単なるカメラであり、発信なんてできない。

「なるほど、確かにそれはそうだ。ただしやはり、条件がある」その言葉に息を呑む。

作戦が崩れる恐れがあった。

ここから安全に逃げ出す作戦。「ここから先は録画は無しだよ。これでは延々と君の支配下だ……いいね？」

「もちろん。最初からそんな卑怯な真似はしないでですよ」

携帯電話をリュックの中にしまう。

声を変えないように、高まる気持ちを抑えるのに必死だった。

頭脳戦というのはこんなに興奮するものなのか。自分の一言一言、相手の一言一言に興奮して、動悸が止まらない。

それを表に出さないのは難易度が高すぎる。

「この命令を出したのはリヨウという男だ。一ヶ月前程に役人になったばかりのな。ずっと労働生活だったから詳しくは知らないがな。直接会った事も無い。まあ、こんなことを頼んで来るくらいだからまともな人間では無いだろうな。それでも俺達にとっては神だ。無駄に使うはずの一生を救ってくれるんだ。あいつが何をしようと関係なくってね。俺たちは自由になって、まっとうな人生を歩む。今思うと、こんなことにカイを巻き込んでしまったのも本当にすまないと思っていてね」

「……僕は大丈夫ですよ」

「そうか、うん。ありがとう。どうだい、カケル君。これが僕の持っている彼についての情報の全てさ。物足りないかもしれないが、全てだから仕方がない。さあ、その動画を消してもらおうか」

その一言を待っていた。それは引き金で、ここからは僕の番だ。

話の内容から、おそらく彼らは期間いっぱいここに拘束するつもりだった。

それでは、未来は変わらない。リョウという男の思うがままになっ
てしまう。

だから、賭けに出る。本日何回目だろう。こんな危険な一日は二度
と来ないはずだ。過去でも今でも未来でも。

「……誰が話を聞いたら動画を消すって言いました？ 今のはあなたが勝手に話しただけです。本当の交換条件を言いますよ。僕たち二人を今すぐ安全に外に出してください。それが条件ですけど、どうしますか？」

一瞬、目を見開き、驚いた顔をしたが、相変わらずすぐに表情が戻る。

「君は今の立場が分かって言っているのかい？ 僕達がやろうと思えば、この世界なんてすぐに壊せるんだよ？」

そして、僕は表情を作り、大げさな動きをする。ここまでは計算の範囲内だ。もし僕が彼であっても、もちろん世界を人質にとって話を優位にすすめようとする。相手には選択の余地がないはずだから。

「……わかったよ。消すよ」

精一杯唇を閉じ、下をみてうつむき、カバンの中に手を入れる。携帯電話を握り、カバンの中を探しているふりをする。

後ろでカイが見張っているのは感じている。失敗は許されなかった。

「あ、あれ、どこいったかな」

急に立ち上がり、大げさに探すモーションをとる。後ろ目に見ると、カイは一瞬動いたが、探すための動きと思ったのかすぐに平静を装う。警戒されているのは分かっている。カバンの中で、もらった端

末でシュウヤに短いメールを送る。

横でいきなり着信音がなり、シュウヤはあわててそれを取り出す。

「もう、シュウヤ！こんな大事な時に音鳴らすなよ、バカかお前！」

「す、すまん……？つてお前がメ……」

「シュウヤ、早く要件済まして電源切つときなよ」

「……！分かった。切つとくよ」

シュウヤは、再び端末をポケットにしまい、さっきと同じく機嫌の悪そうな顔で下を向く。

「あれ、ほんとに無いな。あ、あつた！」

そして、読み通りカイが一目散に携帯電話を奪いに来る。それと同時かそれより早く、シュウヤが椅子から飛び上がり、僕との間にいる。

僕は、取り出した携帯を、さっきカイが操作していた装置に向かって全力で投げた。最初にカイが装置を操作していた時に、さっき僕が壊したのとはほぼ同じつくりの部分が見えていた。つまり、その部分はとても大事で、かつ最も弱いはず。

その予想通り、僕の投げた携帯電話はガラスの部分を破壊、その瞬間部屋の電気が消えた。

その数秒後、明かりがともるとともに、まがまがしい箱に走っていた稲妻が消える。

「あ、ああ、ああああああ。貴様、なんてことを……」

今まで一度も聞くことのなかった、嘆きの声。

そして、絶望に崩れ去った顔が視界に入る。先ほどまでの余裕の笑みは消え去り、透き通った——純粋な憎しみだけで睨んでくる。それが、僕たちの勝利を表すとともに、新たな戦いの始まりを告げる。

初対面の彼、そして全てが

「きつと後ろにいるカイは、携帯を奪いにくる。僕の「あった」という言葉に合わせて僕との間に入って抑えてくれ」

シユウヤはメール通りに動いてくれた。そのおかげでおそらく電気は戻った。きつと、退路にはロボットが活動を再開しているはずだ。そしてここには取り乱した男が二人。

「やっぱりこれやばいよね……」

思わず出てしまう独り言。これでは、相手に勝って勝負に負ける。その後はどうなるかはわからない。下手すれば殺されてもおかしくない。

足が再び震える。怖い。焦点が定まらなくなってくる。冷静さを欠いた目の前の男は、せつかくの綺麗な顔がわからなくなりそうなほどの形相だった。

「ケイ、落ち着いて」

「黙れ、黙れ」

冷静な、同志であるはずのカイの言葉さえ耳に入っていない。

「もうこうなったら何しても同じだ。どうせ一生労働だ。それなら全部壊してやる。街も、人もみんなああああ」

捕まってから今までたまっていた物が溢れ出したのだろう。完全に豹変していた。さっきまでの整った笑顔は影も形もない。

追い込まれた人間は何をしでかすかわからないとはこのことだ。

「やめてくださいよ、私達の街を壊すなんて」

後ろの扉が開く。ケイと同じくらいの年齢だろうか。若い男が立っていた。そして、その男の後ろには、数体のロボットが等間隔で並んでいた。

「誰だお前は、なんなんだよ。邪魔するな、邪魔するなよ」

ケイが近くに座っていた椅子を蹴り飛ばす。

「誰に向かって口を聞いているんだか、犯罪者の分際で。初めまして、

犯罪者の二人と勇気ある少年。僕はリヨウです。以後お見知りおきを」

そういつて僕らに手を差し伸べて歩み寄って来る。何というか、言葉では上手く表せない。表せないんだけど近寄りたくない。

その目が、その言葉が、その全てが危険だと。そう警告する。

「よろしくお願いします」

手を差し出す。何も無い。何も無いはずなのに何かがあるような、不思議な感覚。

「まったく、お客様をこんな風に扱うなんてありえませんよ、カイ、ケイ」

部屋をつかつかと歩いて回る。

「私はですね、この世界は少し進みすぎたと思っています。例えば今のこと。電気がなくなっただけでこの世界はこの有様ですよ。動いたのはあなたたち二人だけです」

歩くのをやめて、視線を僕たちに向けてくる。

「ですから、これはテストなんです。事前に告知せずに電気を断ち切ることでどうなるのかのテストです。彼らみたいなテロリスト紛いが出てきてしまうと簡単に乗っ取られてしまいますね。私は改革を行うことにしました。人間をよりよい方向へ導くために」

だんだんと近寄ってくるその男に見つめられると、金縛りにあったかのように体が動かなくなる。

何を隠すことがあるのか。ただの男なのに、怒っている時の父親よりも恐ろしい存在に思える。

「だから、この情報が外に出るのはあまり好ましくないのです。できれば黙っていて欲しいのですが。できれば……ですよ。もちろん断るという選択肢も無きにしも非ずですが……」

リヨウは部屋の扉のところに整列しているロボットにちらつと視線を送る。その視線はどんな言葉よりも強い脅しとなっている。

ゆっくりとうなずくと、リヨウは笑う。

「賢明です。では、もう帰ってもいいですよ。来た道をそのまま通

ってください。あ、もちろん壊したものの弁償だなんて気にしないでくださいね」

冗談を言っているつもりなのだろうが、全く笑えない。空気は最悪だ。どうやったらこんな居心地の悪い空気を作り出せるんだろう。

「あなたたちの協力のおかげで世界は変わる。いい方向にね」

「その二人はどうなるんですか」

口を開いたのはシュウヤだった。

僕自身が驚いている。一刻も早く帰りたいかった、この場所から逃げ出したかった。自分のために二人のことなんて気にも留めていなかったのに、僕の隣でそんなことを言う。

「それを聞いてどうするんですか？」

「二人は計画を達成したんですよね？だったら普通の生活をできるんですよね？」

どうしたんだろう。さっきまで家で怖がっていた男なのに。

リョウは少し考えるような素振りを見せる。

「善処しましょう。君は優しい人間だ。その心をどうか忘れずに」
「……」

シュウヤは何も言わなかった。それ以上は言っても無駄だと悟ったのだろう。

「行こう、シュウヤ」

「ああ」

二人で来た道を戻る。

その間、どちらも全く口を開かない。

だが、そのことは考える時間をくれる。

未来から来たシュウヤの言っていた支配された世界。

それがさっきの「世界は変わる」ということなんだろう。

リョウという男。言っていることは実は僕と余り変わらない。

向かっている方向が大きく違うだけ。

きっと彼が行うのは粛清だ。

言い方を変えれば独裁による改革。

ただし、歴史上の独裁者と決定的に違うところが一つ感じられた。彼は力で支配する気はないということ。

戦略的かつ圧倒的。

力をもつてして力で制圧しない。これほど強いことがあるのか。

例えば、今のことにしたって、力で制圧する気ならもうできたはずだった。

それを、最初から時間を決めて設定している。

あめとむちという言葉が脳裏をよぎる。

家に着くまで、お互いに最低限の会話しかなかった。

戻る道は来るときと違って明るかった。

それなのに、僕たちの心にはどんよりと雲がさしている。

「なあ、カケル」

「何？」

シユウヤの家につき、入る前に声をかけてくる。

「あいつ、本当にいいやつだと思うか？いい未来のために動いているように思うか？」

「僕は……」

「俺はそうは思わない。あいつは絶対悪い奴な気がする。証拠なんてないただの直感だ。だけど、なんか嫌な感じがしたんだ、どう思う？ほんとにあの二人を助けると思うか？なあ、カケル」

「僕もそう思うよ」

一言。

出てきたのはたった一言。

仮にそうだと、僕に何ができる。

相手はあくまで大事を起こさないつもりだろう。

それなら僕たち一般市民に立ち入るすきはないし、行動したところで誰の目に触れることもなく終わるだろう。

何もできないんだ。

「僕も、そう思うんだよ」

もう一言、続けた。

二人とも胸に抱えている虚無感は一緒だった。

その後もどこか気まずい空気のまま、泥のように寝入った。

指名手配

「おはよう」

「ああ、おはよ」

寝起きの挨拶が交わされる。

二人とも疲れきっていて、起きた時にはもう昼だった。

こっちの世界でも、どうやらテレビのような放送がある。朝一番、いや昼一番に見たのはニュースだった。自分の住んでいる時代となり近いものだ。流れているのは金の話と犯罪の話ばかり。トップニュースの欄を見る。大停電という見出しがあまりに気になりすぎて、他のニュースの内容は全く入ってこない。

「昨日のこと、どう流れるんだろうね」

「やっぱり気になるよな」

「次のニュースです。昨夜、街一帯で大規模停電が起きました。詳しい原因は現在調査中ですが、政府は蓄電所、送電所でのトラブルにより機能が働かなくなったとの見解を示しています。本日早朝の会見の映像です」

画面がその映像に切り替わる。

中央に立っていたのはリョウ。この計画実行させた張本人だった。「国民の皆様。昨夜は私どもの不手際で多大な迷惑をかけたこと、まずは深くお詫び申し上げます。原因は判明しただい随時お知らせします。なお、重大な損害を被られた方々に関しましては、国の方での補償を考えています。ご気軽に問い合わせください」

「以上、会見の様子でした。次のニュースです」

「なんかあいつ、いいやつに見えたぞ」

「騙されちゃだめだよ」

確かに、あの会見だけを見ると、品行方正、容姿端麗な役人に見える。

「問い合わせてやろうかな」

「なんか普通に捕まりそうだね」
しばしの沈黙。

軽い気持ちでいったジョークは意外にも重い気持ちになるものだった。

「次は、新規の指名手配者の発表です」

テレビから聞こえて来たのは聞き慣れないコーナー紹介だった。

「今日から指名手配になったのは、スリや窃盗、不法侵入を繰り返している」

画面に映っていたのは、女の子だった。

「俺たちと同じくらいの女の子でも犯罪とかするんだよな。こんなに可愛いのに」

シュウヤの呟きが聞こえたが、そんなことを気にしている場合じゃなかった。

見たことがある顔。

長い黒髪に、澄んだ瞳。昨日のことが思い出される。ある可愛い女の子とぶつかった。その後、買い物しようとしたらポイントのカードがなくなつて。ぶつかった女の子がスリや窃盗の指名手配犯で「あああああああああ！」

「うわあああああああ」

僕の叫び声に驚いたシュウヤの叫びと共鳴してしまう。

「いきなりどうしたんだよお前、叫び声あげて」

「僕、昨日こいつとぶつかった！そのときにポイントなくしたと思っただけど盗まれてたのか！」

怒りというよりも、少しでもときめいていた自分が恥ずかしかった。

「街で見つけてIDをもらうしかないな」

「いや、街にはいないでしょ。指名手配犯が街でゆっくりしてるなんてね」

「それもそうか」

このことにも驚いたのだが、更に驚いたこと。

テレビで指名手配だなんてあまり気持ちのいい物ではない。

「これ、毎日発表するの？なんか嫌じゃない？」

「嫌？むしろみんな喜んでるぜ？捕まえたら最高でBランクまでIDのランクを上げてもらえるからな。あとお前みたいに持つてないやつなんかは新しくもらえるから、発表されると命がけで探すんだよ」

民衆の、それも最下層の心理を上手く使った統治方法。IDがないとこの街で暮らして行くのはほぼ不可能だ。僕は結果的には家にも住まわせてもらい、IDまで作ってもらえた。一般的な生活はできる。

そして、ケイの話が蘇る。

捕まった人間は強制労働。報酬でIDを与えた分の、それ以上の代価を体で払わせる。

考えてみると、実に合理的で効率のいい方法だ。自分達では何もせず、いい思いをする。

「なんか、変わらないね。こんなところだけ」

「え？」

「なんでもない。それより、自転車直さなきゃ」

昨日、壊れたと思った自転車。変える時に見てみると、

チェーンは外れてるわカゴはへこむわで、とても乗れる状態ではなかったが、直せば乗れないこともなさそうで、二人で復活した靴で楽々運んで来た。

生きているのはハンドルと荷台だけ。

「ペンチとかない？」

言ったあとに気がつく。多分無いだろう。未来の人達がわざわざ自分で修理するはずがない。

「そのカバンをあされば工具一式はいつてるよ」

そうそう。どうせこんな感じでカバンをあさると工具一式が……

「何であるんだよ！」

「はあ？お前が聞いたんだろ。俺、蓄電所で仕事してるっていったろ」

「そついうのつて機械がやるんじゃないの？」

「よくわからんけどなんかあの中だと機械はダメになるらしいぞ」
ことごとく予想を裏切られて何回目だろう。この時代が嫌になつて来た。

「借りるよ」

家の外に止めてある自転車をあらためてみると、泥よけも曲がつているし、ベルもどこかへ消え去つていた。

「とりあえず泥よけは外しちゃおうかな。泥無いし」

「なあ、それ直して使うほど大切なのか？この靴あれば全然疲れないのにさ」

シユウヤは一緒に外に出てきて、履いている靴を指差す。

「親が買ってくれた物だからね。大切にしなきゃ」

「親、か」

シユウヤはゆっくりと、つぶやく様に言った。

香り再び

「それは嬉しいものだよな。大事にしないとイケない。なんか手伝えることあるか？」

一瞬の不自然な間があった。だが、気にせずには答える。

「うん、ありがとう。こっち持つてて」

何か親に嫌なことでもあるのかもしれない。一人暮らしだし、今の言い方にも何か違和感があった。でも、それは僕の立ち入るべき話では無い。

今、二人でこうして楽しくやれていればいいのかも知れない。過去に帰る手段が見つかるまでの希薄な関係なんだから。

「できたっ！」

そんな大声をあげる様な大層な物が出来上がったわけじゃない。むしろ、カゴの残骸を取り外し、タイヤがむき出しになり、物凄くダサイ。

「ん、ちょうどいいな。俺も学校いつてくる」

「何の勉強してんの？」

「機械とか電気だよ」

「専門学校行ってるんだ」

「なんだそれ」

ジェネレーションギャップ発動。

「ってことは普通の高校でそういう授業があるのだろうか。物理の延長上かもしれない。」

「それ以外は勉強しないの？」

「してどうするんだよ」

「……いい国作るう？」

「おう、頑張れ」

「なくよウゲイス？」

「ウグイスってなんだ？」

「ごめんなんでもない、忘れて」

どうやら有名語呂合わせは通用しないらしい。小学校レベルの歴史なのに。

「小学校の時何勉強してたの？」

「

「小学校？小さいときってことか？小さい時からずっと同じだよ。自分が将来やりたい事をずっと勉強するのが当たり前だろ」

「いいな……」

やりたくもない勉強に追われる日々。いい生活をしようと思うと、勉強しないと難しい。少し、こっちの時代の方が住みやすかったりするのかもしれない。

「お前も学校来る？」

「遠慮しとくよ、ついて行けないし」

小さい時からやっている人達にどうやってついていけというのか。

「んじゃ、また夜にな」

「いつてらっしゃい」

自分も準備を整えて街へ繰り出す。

何か過去に関する、僕の時代に関する物を手に入れたら嬉しいし、大人シユウヤが調査してくれているものの、自分で調べて見るのも悪くない。

ダサい愛機に乗って、街へ行く。あまり近づきすぎると目立ってしまう。

自転車よりもはるかに楽な靴に乗って進む。

「確実になれてきてるな……。戻りたくなっちゃうかも」

一人言で、戻りたいという気持ちを確認する。

街についてからは、とことん店という店を回った。

そして、一時間もする頃には。

「迷った……」

昨日と全く違う道を歩き、昨日よりも行動範囲をかなり広げた結果、土地勘が全くないせいですっかり迷ってしまっ

「ま、歩いていればなんとかなるか」

くだらなく歩き、気づいたら帰れてた、という感じを狙おう。

そう思った瞬間、後ろから足音が聞こえる。振り向いた時には遅かった。

振り向いて、抱きかかえるかたちになる。

「だ、大丈夫ですか？ごめんなさい！」

あわてて離れると、頭を下げて謝られる。

長く真っ直ぐな黒い髪。

今は帽子を目深にかぶって顔を隠している。

その少女の優しく緩んだ口元と少しだけ赤い頬が僕の心拍数を上昇させる。

「って、お前は！」

慌てて手をつかむと、あっちも気づいたのかバツの悪そうな顔だった。

「や、やあ。元気だった？」

「うん、おかげさまで」

決して手を離さないように力を入れる。

「ちよっと痛いかも、もうちよっと優しくしてくれると嬉しいんだけど……ダメ？」

「今さら猫かぶりされてもな」

「結構手厳しいこといますね、お兄さん」

上目遣いでこっちを見てくるものだから本当にドキドキする。

何といっても可愛い。とても犯罪をするようには見えない。

何か叫び声が聞こえる。

「いたぞ、指名手配犯」

走ってきた三人程の男。

それを見ると、少女は顔を見られまいと帽子をさらに深くする。

「おい、ガキ。その女を渡せ」

一人が、詰め寄って来る。

「渡さないよ。せつかく苦勞して見つけたんだから」

「早く渡した方が身のためだと思うぜ」

チンピラよろしく拳を握って見せてくるものだから、少し怖かったが正直、昨日のことに比べれば全然楽だった。

「今からこいつをリヨウさんのところに連れて行こうと思ってるんだけど。昨日も少し話をしたりしたし、おまけしてくれるかも。この街の将来についてとか、結構真剣に。手荒な真似してもいいけど、少し頼めばIDの

剥奪くらい簡単なんじゃないかな」

三人がざわつく。

「ま、せつかくIDのランク上がっても剥奪されちゃ意味ないよね。大人しくしてて。行くぞ、早く来い」

少女の手を少し強引に引っ張る。演技に欠かせない演出だ。

「ちょ、ちょっと」

どうもこの時代の人間はID剥奪という言葉に弱いらしい。脅しとしては最高クラスだ。

眼鏡と和解と色眼鏡

「どこ連れてくつもり、私捕まる気ないから。離して！」

「大人しくして、嘘がばれたらどうするのさ」

男達に聞こえないように小声で囁く。

「え、嘘？」

「いいから」

路地をどんどん曲がって行く。

道はわからなかったが、どうせ迷っていたので一向に構わない。今さら道を二三本変えたところで影響はないだろう。

腕を掴まれたまま、少女は何も言わなくなった。

だが、あまり人の多いところには行けないだろう。今みたいなことになって面倒だ。

警察、ではないけれど政府に突き出す前に話をしたかった。

お金はまあ仕方ないとして、どうしてこんなことをしたのか、とかそんなこと。

僕はこの時代の人間じゃないから、IDの価値については無頓着だから突き出した所できつと得した気にもならないだろう。

そして、昨日のことからわかったことがある。

シユウヤの驚きを見ると、この時代の人間は捕まった人間がどうなるのかを知らない。

でも僕は知ってしまった。だから、例えば加害者と被害者の関係であってもむやみに差し出したくないところもある。

僕の時代なら一般的に「偽善」と呼ばれる行為かも知れない。でも、僕には不思議とそれ以外の考えは浮かばなかった。

ゆっくりと話ができて、誰の目にもつかない場所。考えてみても、思いつかない。店なんか全く知らないし、そもそも僕の間感ではこの街にはついていけない。一通り考えて思いついたのは一力所だけ

だった。

「ねえ、道案内頼んでいいかな」

「役所までの道とかいったら今すぐ蹴り飛ばして逃げるから」

かなり警戒されている。一応助けられた自覚はあるらしく、抵抗はしないまでも、逃げる隙を狙っているらしい。

「やめなよ、女の子でしょ？実は」

自転車を止めた場所周辺にあった特徴的な建物を思い出せる限り話す。最初は唸りながら考えていたが、最後の方には見当がついたらしい。

「大体わかりました。連れていきますから手を離してくれませんか」
もう片方の手で握っている手を指差す。

「逃げないならいいけど」

「何がしたいの？わかんないんだけど」

「話したい。だから少なくとも追っ手がこなさそうなところまで連れて行くかと」

「そんなところないわよ、この街には」

「知り合いの家なんだけどさ、そこならとりあえず大丈夫だと思う」

「……家？なんか懐かしい響き」

懐かしい、と言ったあとの彼女は失言したと思ったのか詮索を拒むように慌てて下を向く。

今は極力触れないようにしてあげることにした。

「あ、でも私みんなが履いてるような靴持っていない」

彼女の足元を見ると、ボロボロのいわゆるスニーカーのようなものだった。

「そ、それで今まで逃げて来たの？」

「今までって、手配されたの今日だもん。もう街歩けないから買いだめしなきゃって思ってたのにどこの店にも私の指名手配の知らせがあつてさ。なんでばれたんだろうなー、もう最悪」

反省の色は全く見えないが、少し気の毒だった。

「あ、そうだ」

しよっていたカバンの中に手を入れる。

学校授業の時だけつける、度の弱い眼鏡があつたのを思い出す。

「変装と言えば眼鏡がセオリーだよ、はい」

ケースの中から黒縁の眼鏡を取り出して、手渡す。

「な、何これ。何するものの？体の自由がきかなくなるとかそういうの？」

かなり引き気味に言われる。この時代には眼鏡がないのか。もう驚く程の衝撃は無くなっている。

「眼鏡っていつてね、目が悪い人がつけるものだよ。僕のはほとんど変わらないけど」

「目が悪かったらそんなのつけてないで目薬差せばいいのに」

目薬をさせば目がよくなる時代なのか。是非差してから帰りたいものだ。

「とにかくこれかけて、はい」

「かけてって言われても……」

眼鏡を片手に持って傾けたり裏返したりしている。

「貸して」

眼鏡を彼女の手から取ると、彼女の手を離して目深な帽子を少しずらして眼鏡をかけてやった。急でびっくりしたのか、目をつむったその顔は赤みを帯びる。

「いきなり何するのさっ！」

少し距離を置かれる。というより手を離してしまった。

「あ、案内するからついて来て」

帽子を目深にかぶり、一人で歩いて行ってしまった。

その後ろ姿を見る。

長い真っ直ぐな黒い髪。

すらっとした手足にそれを強調するような昨日と同じ服。

目立つ。

物凄く目立つ。

僕の時代なら街をあるけば誰もが振りかえるほどの容姿だ。

「何か策を練らないとすぐ見つかるな、あれは」

その時に、一つの考えが浮かぶ。

なんでこの少女はこんな犯罪をしたのか。

歳も近く見える。

それがこの規模で指名手配なんて。

最初は、被害者だっただけに犯罪者としてしか見ていなかった。

犯罪者、つまり捕まるべきで、罪を償うべき存在。

そう思っていた。指名手配、犯罪者という分類だけで。

なのに、何故僕は助けているのか。

とつと突き出せばいいのに。

何だっけ、なんとかってという罪に問われるんじゃないかな。

良く知りもしない僕の時代の法律を思い出す。

いきさつを知りたくなってしまったんだ。

この少女はどうしてこんな風に。

だから、急いで追う。

彼女は流石、この街の裏道という裏道を知り尽くしていて、街中を通ることなく目的地に着くことができる。

来るときに思ったこと。

この周辺は、街以外に人が出歩いていることはめったにない。

そして考えてみる。

僕の常識から行くと、学校があるということは平日。この時代の時計を確認すると、午前中。平日の午前中は、皆が学校や仕事に出払うことから人通りは休日や午後に比べると少ないはず。

現に、来るときにはあまり人にすれ違わなかった。

自転車を引き出してくる。

今の時間なら全力で漕げば一人にも見つからずに帰ることができるかもしれない。

「乗って」

自転車にまたがって、声をかける。

だが、彼女は乗ってこない。

顔を見ると、物凄い目で見られている。

自転車が可哀そうになってくるくらい目線だった。

「逃げたくないの？早くしないと人来るって」

催促してみると、しぶしぶ寄ってくるが眼鏡の時と同様に初めて見るものへの戸惑いを見せる。

乗り方を教えると、やっと乗ることができ。足を挟まないように十分注意してからこぎ出す。

「な、何これ。かなり怖いんだけど大丈夫なの？」

「多分。でもつかまってた方がいいかも」

「っ、つかまる？逃げるんじゃないって？」

「……なるほど。僕のこと掴んでた方がいいかもって意味」

「な、なるほど。わかった。こう？」

手を回してくる。柔らかい体の感触。

昨日の香り。

儂くて、消えそうな。でも物凄くいい香り。

女の子を後ろに乗せるのは初めてで、かなりドキドキする。

法律は極力守る人だったから、二人乗りはおるか信号無視だってしたことはない。

それなのに、こっちに来てからは何だろう。もう元の時代では二、三回警察のお世話になりそうだ。

「君、変なやつだね。朝から血眼になってみんなが追ってくるのに。犯罪者、犯罪者って」

「別に。盗まれたポイントをどうしようか迷ってたね」

「やっぱり君もそういうやつだったのか、ちょっと信じたのに」

「あ、暴れないで、危ないから」

そんなやり取りを繰り返し、家に着く。

「まず入って」

昨日もらった認証キーで家の中に入る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3268u/>

過去が未来を超える今

2011年10月6日01時41分発行